

ほしい
糯・上の原遺跡

福岡県田川市所在遺跡の調査

付、セスドノ古墳周濠部の調査

田川市文化財調査報告書

第 7 集

1 9 9 2

田 川 市 教 育 委 員 会

序

この報告書は、糯・上の原地区で農道拡幅工事の事前調査として行われた上の原遺跡の発掘調査と、市立病院医師住宅の建て替え工事の事前調査として行われたセストノ古墳周濠部の発掘調査の記録です。

貴重な埋蔵文化財が開発により失われていくことは残念ではありますが、発掘調査を行い報告書を刊行することによって、市民の文化財意識の向上、ならびに原始・古代史研究の一助となるならば幸いです。

なお、両遺跡から出土した遺物は、田川市石炭資料館で整理・保管し、漸次公開していきたいと考えております。

この調査にあたり、ご尽力いただきました福岡県教育庁筑豊教育事務所ならびに関係各位のご理解とご協力に対し、深く感謝の意を表します。

平成4年3月31日

田川市教育委員会

教育長 角 銅 圓

例 言

1. 本書は、田川市 楠^{ほしい} 513～514、518～523番地所在の上の原遺跡と、田川市伊田3847-1 番地所在のセスドノ古墳の埋蔵文化財発掘調査の記録である。
2. 上の原遺跡の発掘調査は福岡県教育庁筑豊教育事務所が、セスドノ古墳については田川市教育委員会が担当した。
3. 遺構の実測と写真撮影は各担当者が行い、遺物の実測は田川市石炭資料館の田代健二が行った。遺物の写真撮影は、石丸洋の指導のもとに九州歴史資料館で行った。
4. 出土遺物の整理・復元は、九州歴史資料館にて岩瀬正信指導の下に行った。
5. 本書の執筆は、Ⅰ、Ⅲ-1・2・3、Ⅳは新原が、Ⅱ、Ⅲ-4 およびセスドノ古墳周濠部調査報告は田代が担当した。
6. 本書の編集は田代が担当した。

本文目次

Ⅰ 調査に至る経過	1
Ⅱ 位置と環境	2
Ⅲ 調査の内容	4
1. 貯蔵穴	4
2. 住居跡	9
3. 上の原古墳周溝	12
4. 出土遺物	15
Ⅳ まとめ	27
付、セスドノ古墳周濠部の調査	28
Ⅰ 調査に至る経過	28
Ⅱ 調査の概要	29
Ⅲ 出土遺物	31

挿 図 目 次

第1図	周辺遺跡分布図 (1/10,000)	3
第2図	遺跡地形図 (1/1,000)	5
第3図	遺構配置図 (1/200)	6
第4図	1～6号貯蔵穴実測図 (1/60)	8
第5図	7～8号貯蔵穴実測図 (1/60)	9
第6図	1・2号住居跡実測図 (1/60)	10
第7図	3号住居跡実測図 (1/60)	11
第8図	上の原古墳トレンチ配置図 (1/200)	12
第9図	上の原古墳周溝土層図 (1/60)	13
第10図	上の原古墳石室実測図 (1/100)	14
第11図	上の原遺跡出土土器1 (1/4)	18
第12図	上の原遺跡出土土器2 (1/4)	19
第13図	上の原遺跡出土土器3 (1/4)	20
第14図	上の原遺跡出土土器4 (1/4)	21
第15図	上の原遺跡出土土器5 (1/4)	22
第16図	上の原遺跡出土土器6 (1/4)	23
第17図	上の原遺跡出土土器7 (1/4)	24
第18図	上の原遺跡出土土器・石器 (1/4)	25
第19図	上の原遺跡出土石器 (1/4)	26
第20図	2号住居跡出土管玉 (1/1)	27
第21図	セスドノ古墳調査区平面図 (1/400)	28
第22図	周濠断面図 (1/60)	29
第23図	第1トレンチ平面図 (1/150)、小溝断面図 (1/60)	30
第24図	セスドノ古墳周濠内出土遺物 (1/3)	31

図版目次

- 図版 1 1. 遺跡遠景（南から）
 2. 遺跡全景（西から 後に見えるのは香春岳）
- 図版 2 1. 遺跡全景（発掘前 南から）
 2. 遺跡全景（発掘後 南から）
- 図版 3 1. 1号貯蔵穴
 2. 4号貯蔵穴
- 図版 4 1. 5号貯蔵穴
 2. 8号貯蔵穴
- 図版 5 1. 6号貯蔵穴底面周溝
 2. 2号貯蔵穴遺物出土状態
- 図版 6 1. 1号住居跡（南から）
 2. 3号住居跡（東から）
- 図版 7 1. 2号住居跡（南から）
 2. 2号住居跡内管玉出土状態
- 図版 8 1. 上の原古墳全景（南から）
 2. 上の原古墳トレンチ内周溝（東から）
- 図版 9 上の原遺跡出土土器 1
- 図版10 " " 2
- 図版11 " " 3
- 図版12 " 石器・管玉
- 図版13 1. セストノ古墳調査区全景（調査前 南から）
 2. 第1トレンチ周濠検出状態（南から）
- 図版14 1. 周濠断面（第1トレンチ東壁 西から）
 2. セストノ古墳周濠内出土埴輪

I 調査に至る経過

上の原遺跡は、「福岡県文化財等分布地図」に縄文から弥生時代の遺跡として登録されている。

当遺跡付近では、細型銅剣を出土した石棺墓や、先年の金川小学校体育館新築工事中にも弥生時代の貯蔵穴が発見され、上の原台地全体を遺跡ということができる。

その台地を南北に通る月の輪線の改良新設工事計画があることを昭和63年夏に知り、事業担当者の田川市と交渉を重ね、平成元年1月から事前に発掘調査を行うこととなった。

発掘調査は、田川市教育委員会が事業主体となり、実際の調査は福岡県教育庁筑豊教育事務所が担当した。

現地の調査は、平成元年1月12日から2月7日まで行い、出土遺物の復元作業は平成2年度中に九州歴史資料館にて行った。

調査の組織は次の通りである。

総括	田川市教育委員会	教育長	角 銅 圓
庶務		文化体育課長	西 村 勝
		文化係長	平 賢 一
		石炭資料館主任	橋 岡 佑 子
		〃 学芸員	森 本 弘 行
		〃 嘱託	花 村 究
調査担当	福岡県教育庁筑豊教育事務所	技術主査	新 原 正 典

なお、調査に際しては、地元の下伊田地区の方々のご協力をいただいた。田川市立金川小学校（高橋昭朗校長）には器材倉庫の斡旋など何かにつけてお世話になり、地元在住の植木忠氏には当地方の考古学情報の御教示を受けた。また福岡県文化財保護指導委員の水上薩摩氏や桂川町教育委員会の長谷川清之氏には現地で御指導を仰ぎ、稲築町教育委員会の上野智裕氏には実測の応援を受けた。ここに明記して御礼申し上げます。

II 位置と環境

田川盆地の東側を、南から北へ流れる彦山川の東に沿って田川東丘陵と総称される標高40m前後の低丘陵が連なっている。今回調査した上の原遺跡は、丘陵北部の大字楠513番地他に、セストノ古墳は中央部の伊田3847-1番地他に所在している。田川東丘陵は、盆地内で最も遺跡の密集した地域で、北端部の寺の上遺跡からはナイフ形石器が、坂本遺跡からは縄文時代早期の押型文土器が採集されている(註1)ほか、セストノ古墳から西に降りた丘陵裾部の先法月(さきのほうげつ)遺跡からは縄文時代後期の資料が採集されており(註2)、この時期から開けていたことがわかる。

弥生時代には、彦山川と金辺川の沖積地を利用した水稻耕作が行われていたと思われるが、まだ水田跡は検出されていない。丘陵上の平坦部では各所で遺物が採集されており、特に下伊田から楠にかけてはほぼ全面にわたって遺物の散布が認められる。おもな遺跡としては、弥生時代前期後半の下伊田式土器の標識遺跡として著名な下伊田遺跡が上の原遺跡の南側に位置しており、北側に隣接する金川小学校の建設の際にも多量の土器片が出土している(註3)。これらの集落は一連の共同体を形成していたと思われる。また、寺の上遺跡では、細型銅剣を副葬した箱式石棺が出土し、その近くには墳丘墓の可能性のある小マウンドがあり、土器片を採集している。この事から見て、この地点に集団墓地の存在が予想される。

古墳時代には、今回の調査地点の周辺に群集墳が形成されていたようであるが、明治から大正時代にかけての耕地整理によってほとんどが消滅しており、現在は上の原古墳と石棺が一基残っているだけである(註4)。上の原古墳は複室構造の横穴式石室で、副葬品等は明らかでない。寺の上から北西に伸びる尾根上には天神山古墳群(註5)がある。以前は4基の古墳があったとされているが、現在確認できるのは1基のみである。これは直径約10mの小型墳で、形状から見て前期の可能性もある。セストノ古墳の周囲には猫迫1号墳、2号墳があり古墳群を形成している(註6)。1号墳は主体部の箱式石棺が露出しており、墳丘はほとんどが流失している。2号墳は未調査のまま破壊されたので詳細は不明である。この他にも桐ヶ丘では石棺墓が出土しており(註7)、耕作に不適な地域が墓域に選定されたのであろう。

奈良時代以降も集落は形成されていたものと思われるが、現在のところ明らかではない。

註1 長谷川清之「田川市楠植木忠氏資料の紹介(その1)」『郷土田川32号』1989

註2 花村利彦「第二篇 先史時代」『田川市史上巻』1974

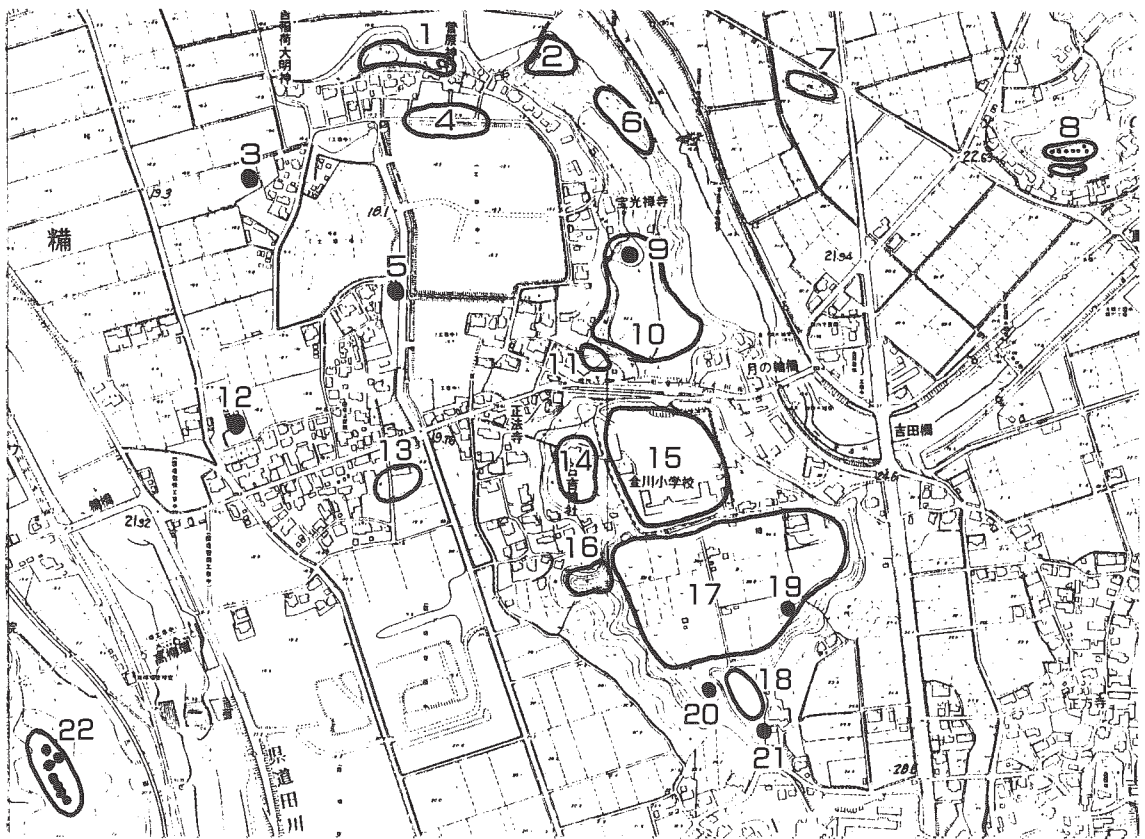
註3 =註1

註4 =註1

註5 福岡県教育委員会『福岡県遺跡等分布地図』1977

註6 =註5

註7 上野智裕「桐ヶ丘遺跡緊急発掘報告」『郷土田川31号』1988



上の原遺跡周辺



セストノ古墳周辺

第1図 周辺遺跡分布図 (1/10,000)

1. 天神山古墳群 2. 亀岩遺跡 3. 松ノ木田遺跡 4. 天神前遺跡 5. 木殿遺跡 6. 寺の裏遺跡 7. 小塚横穴群
8. 若八幡神社古墳群・横穴群 9. 寺ノ上石棺墓 10. 寺の上遺跡 11. 阿弥陀前遺跡 12. 下ノ田遺跡
13. 門出遺跡 14. 上の原遺跡第1地点 15. 上の原遺跡第2地点 16. 上の原遺跡第3地点 17. 上の原遺跡第4地点
18. 上の原遺跡第5地点 19. 上の原古墳 20. 山伏塚 21. 石棺出土地 22. 長谷池古墳群 23. セストノ古墳
24. 猫迫1号墳 25. 猫迫2号墳 26. 桐ヶ丘石棺墓 27. 先法月遺跡 28. 夫婦塚古墳 29. 香春隠神社古墳
30. 蜚ヶ丘横穴墓群

III 調査の内容

上の原遺跡は、彦山川の東岸に沿って南北方向に延びる丘陵で、南北長約1.5km、最大幅0.5kmを測る。標高は38～40mの位置にある。

丘陵の中央部を、南北に県道が寸断するが、北側は「寺の上」と呼ばれ、石棺墓などが出土している。また、南側の金川小学校とその裏の畑を中心とする地区は「宮の前」で、ここでは住居跡等が発見されている。

上述したように、上の原遺跡は台地全体に広がる弥生時代の一大集落跡である。

今回の発掘調査の対象となった場所は、金川小学校の南裏手に広がる畑地の中央を、南北に通る農道沿いである。道路工事は現有2m幅の農道を5m幅に拡幅するもので、工事距離は、北端にある民家脇から丘陵南端までの約100mの間である。

発掘調査は、この500㎡の範囲全体について行い、また、丘陵南端に所在する横穴式石室を内部主体とする上の原古墳についても、墳丘裾が道路に一部かかるため、その個所についての発掘も行った。

発掘調査は、広い台地の中に、一本の細いトレンチを設けたようなものであったが、調査区全体にピットが認められ、中央部付近にて、弥生時代の住居跡3軒と、貯蔵穴9基を検出した。また、南端のトレンチでは、上の原古墳の周溝を確認した。

1 貯蔵穴

貯蔵穴は9基検出したが、中央に位置する9号貯蔵穴は、大半が調査区外にかかるため発掘は行わなかった。貯蔵穴は調査区の中央に集中し、南北両端では少ない。

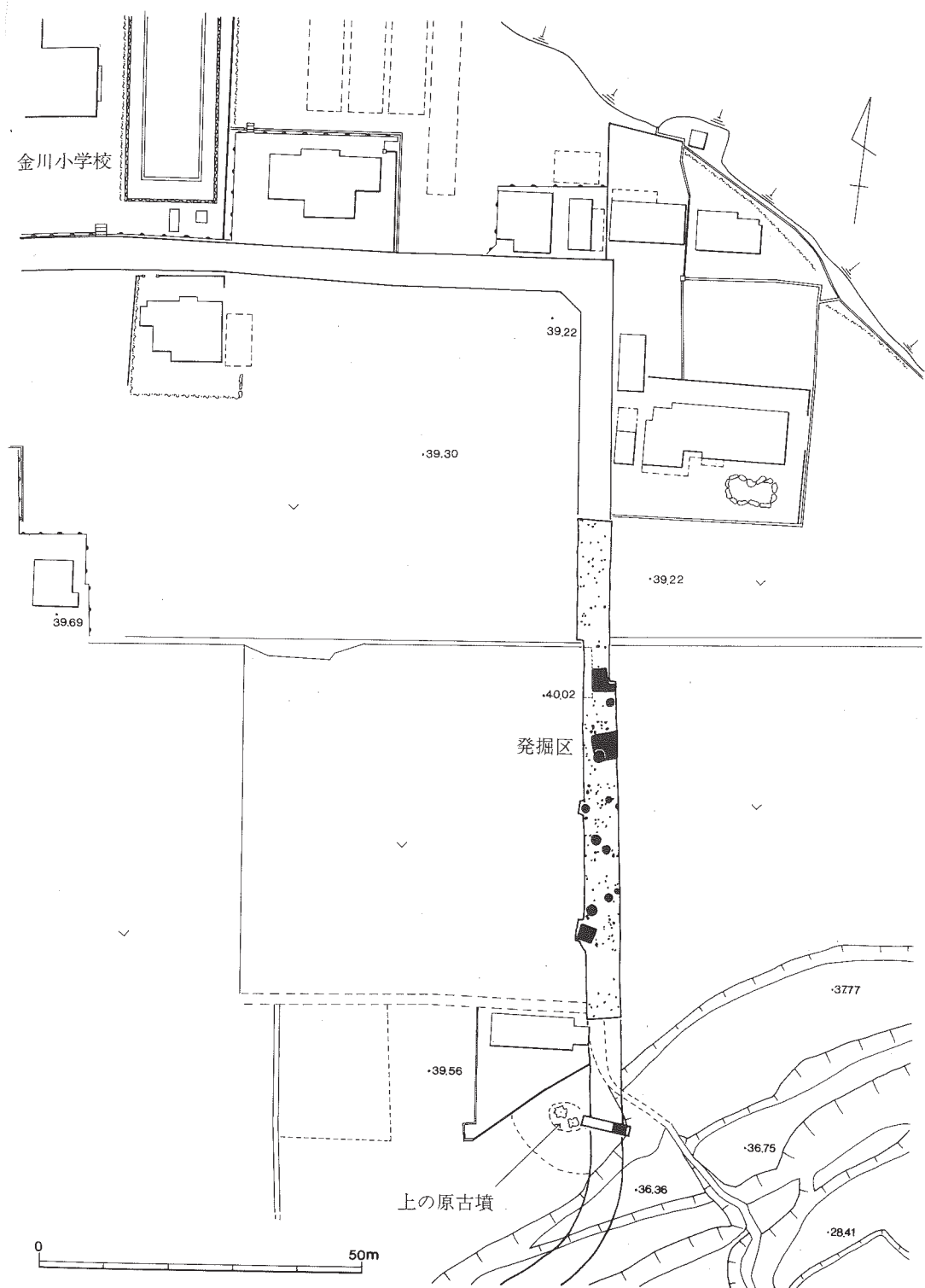
以下、全掘した1～8号貯蔵穴について説明を行う。

1号貯蔵穴

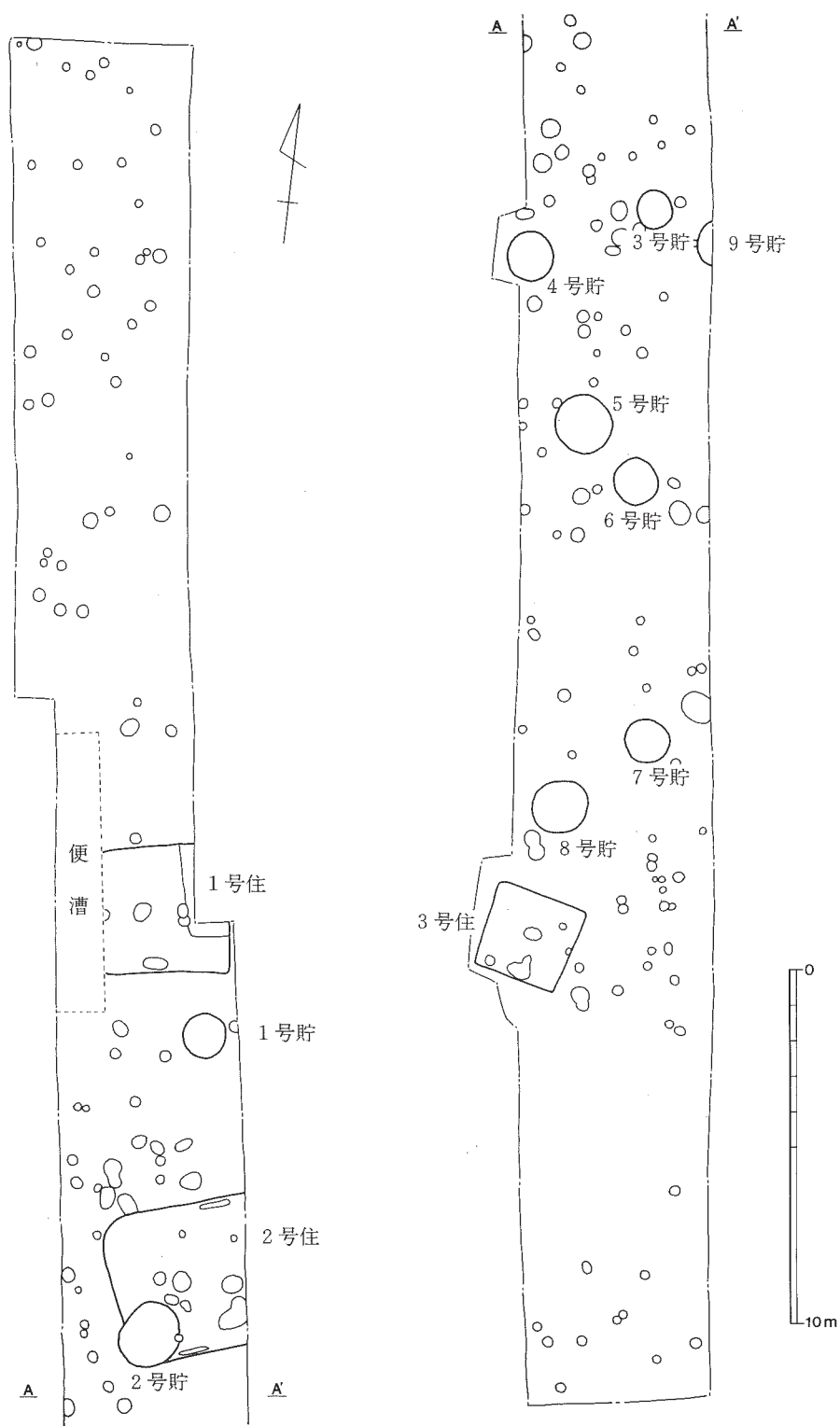
調査区内の北端で検出し、1号住居跡の南1.5mの位置にある。上面径1.19×1.16m、底面径1.78×1.76m、深さ0.73mを測る袋状竪穴である。平面は円形を呈し、周壁上部は崩落しているが膨らみはなく、傾斜はきつい。底面は中央部が凹む。埋土から多くの土器が出土した。

2号貯蔵穴

2号住居跡と重複しているが、住居跡上面では貯蔵穴の確認はされず、住居跡底面にて検出された。よって、貯蔵穴が古いことが分かる。周壁上部は崩壊している。円形を呈し、上面径1.68×1.54m、底面径1.94×1.83m、深さ1.33mを測る袋状竪穴である。周壁は底面近くで中膨らみとなる。底面中央部はやや凹む。底面近くにて土器が少量出土した。



第2図 遺跡地形図 (1/1,000)



第3図 遺構配置図 (1/200)

3号貯蔵穴

2号貯蔵穴より南5mの位置で検出した。周壁上部の崩壊は著しい。円形で上面径1.36×1.35m、底面径1.42×1.36m、深さ1.06mを測る袋状竖穴である。周壁の膨らみも崩壊のためよく分らない。少量の土器が出土している。

4号貯蔵穴

3号貯蔵穴の西4mの地点で検出した。円形で上面径1.42×1.29m、底面径2.06×2.04m、深さ1.28mを測る。周壁の崩落も少なく、ほぼ原型を留める袋状竖穴である。周壁の膨らみはほとんどなく、傾きもきつい。底面は中央部が凹み、径30cm、深さ10cmの小ピットが1個掘られている。埋土より少量の土器が出土した。

5号貯蔵穴

4号貯蔵穴の南5mの位置で検出した。周壁の崩落は著しい。円形で上面径1.6×1.54m、底面径1.53×1.52m、深さ1.48mを測る竖穴である。底面はほぼ平坦である。埋土より土器が少量出土した。

6号貯蔵穴

5号貯蔵穴の南東2mの距離にて検出した。円形で、上面径1.23×1.15m、底面径2.38×2.33m、深さ1.54mを測る袋状竖穴である。周壁上部は崩落するが、下半はほぼ原型を保っており、中位にて周壁が強くすばまる。底面は平坦だが、周壁沿いに幅10cm、深さ5cm前後の周溝がつくられる。ただ、北端側にて途切れており、全周しない。埋土中層から下層にかけては灰層があり、ここから多数の土器が出土した。

7号貯蔵穴

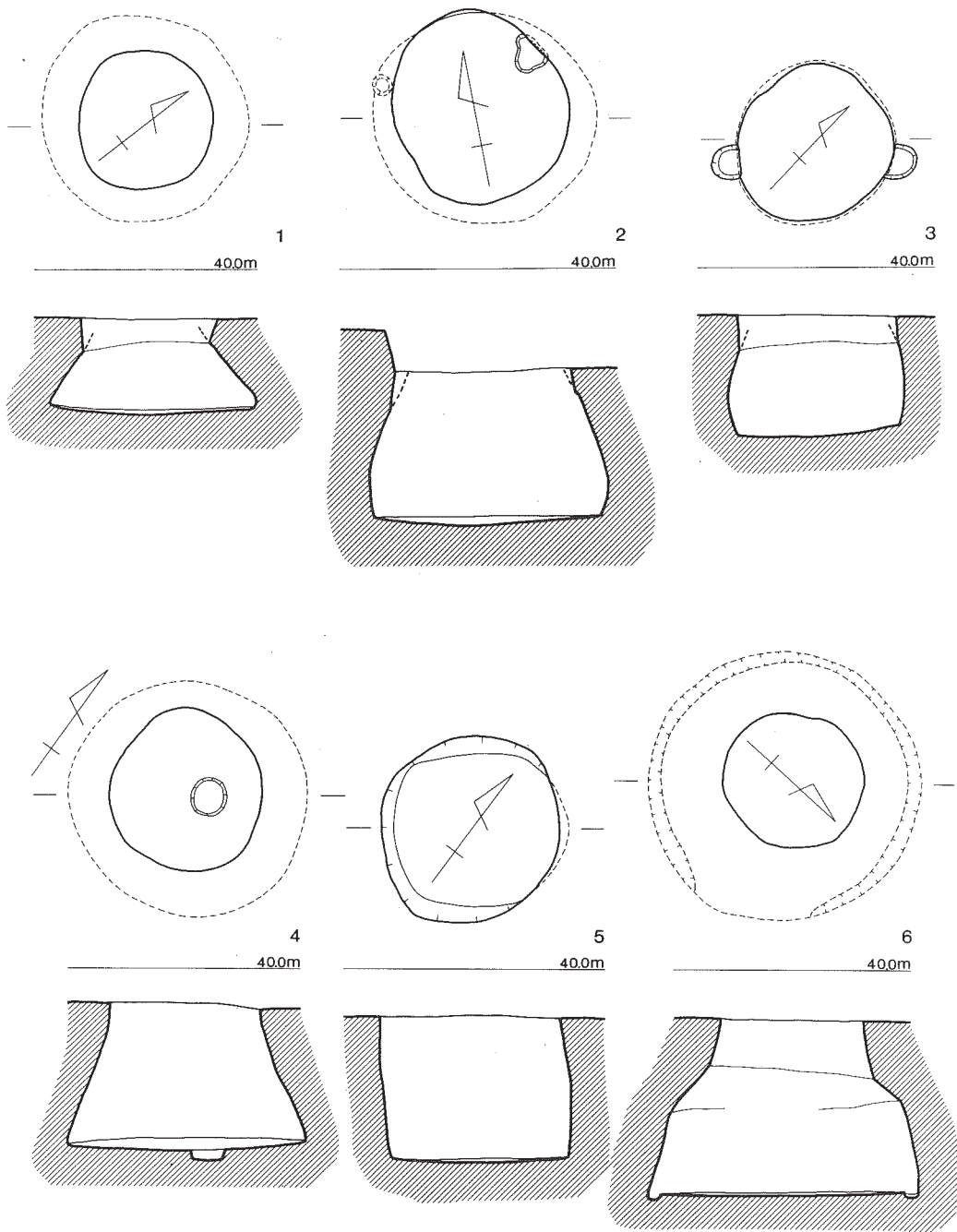
6号貯蔵穴の7m南にて検出した。円形で、上面径1.2×1.16m、底面径1.92×1.85m、深さ1.82mを測る袋状竖穴である。周壁上部は崩壊している。周壁は中位にて中膨らみとなり、上位はすばまる。底面はほぼ平坦である。埋土中より多数の土器が出土した。

8号貯蔵穴

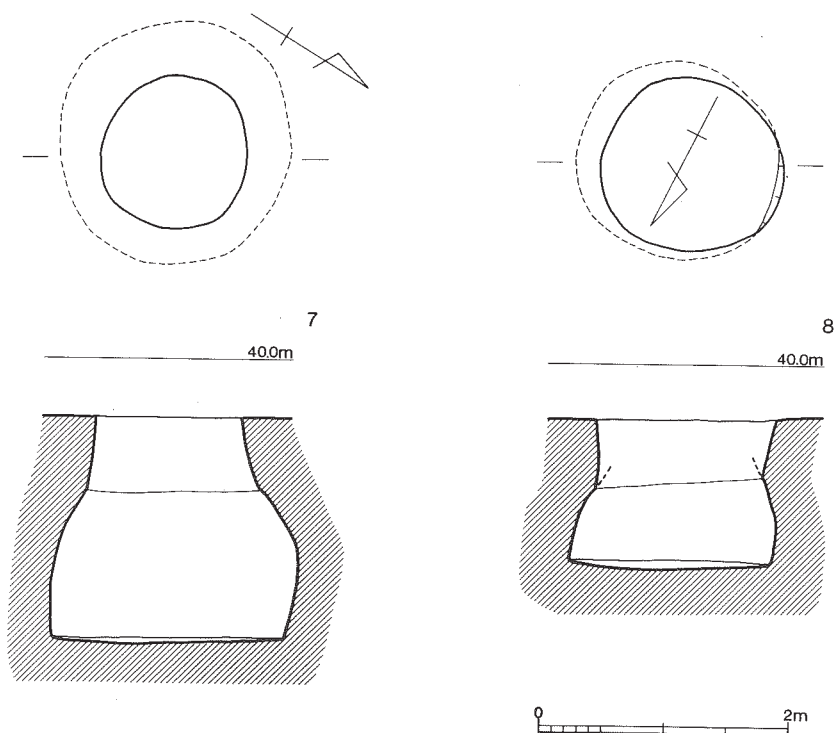
7号貯蔵穴の南西3mの距離にあり、3号住居跡は南4mの位置にある。円形で、上面径1.46×1.4m、底面径1.61×1.6m、深さ1.19mを測る袋状竖穴である。周壁上部は崩壊しているが、東壁が中膨らみとなる。底面は中央部がやや凹む。底面よりやや上位にて、小型壺が完形で出土し、他に扁平片刃石斧などがある。

9号貯蔵穴

3号貯蔵穴の1.5m離れた南東隣で検出したが、大半が調査区外のため発掘は断念した。上面は円形で、径1.3mを測る。遺溝の規模・埋土の状況からみて、貯蔵穴と思われる。



第4図 1～6号貯蔵穴実測図 (1/60)



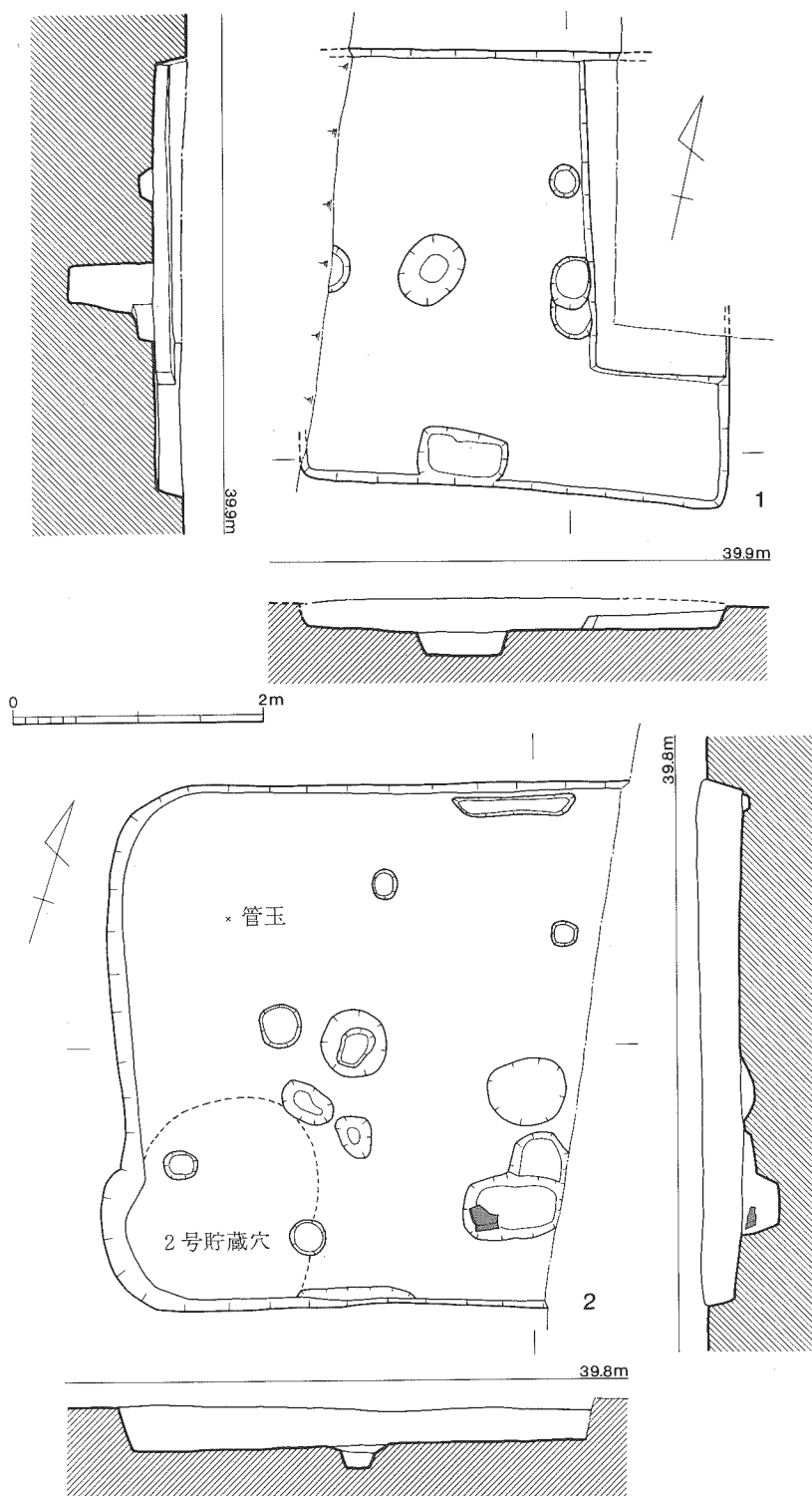
第5図 7～8号貯蔵穴実測図（1／60）

2 住居跡

住居跡は3軒検出された。1・2号住居跡は東半が調査区外にかかるため、全掘できたのは3号住居跡のみである。

1号住居跡

1号住居跡は、調査区内では最も北に位置している。方形竪穴住居跡で、東辺北端は調査区外にあるため未掘。西辺はコンクリート製便槽により破壊されているが、南壁の規模はどうか確認できた。東西間の南壁は3.3m、南北間は住居跡中央にて3.5mを測るほぼ正方形を呈し、北辺はやや西に傾く。住居跡の深さは遺存のよい北壁部で28cmを測る。住居跡内東半には2.5×1.1m、高さ15cm規模のベッド状の壇を北東隅に寄せて作っている。床面中央には58×48cm、深さ16cmの楕円形坑があり、炉跡かと思われるが、炭や灰などは出土していない。また、南壁中央部に接して70×35cm、深さ9cmの浅い長方形坑があり、内部から炭片が出土した。柱穴と思



第6図 1~2号住居跡実測図 (1/60)

われるピットは現状では4個あるが、まとまりがない。

北西隅付近にて壺が、南東隅にて高杯片が出土し、全体として少量の土器が出土した。

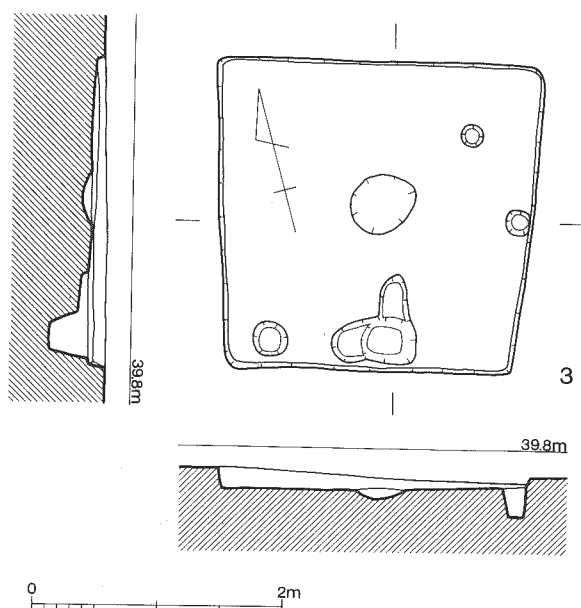
2号住居跡

1号住居跡の南8mの距離にて検出した。東辺は調査区外にかかるため未掘。現状での規模は、 $4.15 \times 4 + \alpha$ mを測る方形竪穴住居跡である。周壁の深さは、残りの良い個所で39cmある。この住居跡南西隅壁は2号貯蔵穴と重複しているため少し張り出る。貯蔵穴が埋没した後住居跡が作られたものである。北西隅のカーブは大きい。床面は平坦で、中央に径55cm、深さ17cmの二段掘りピットがある。炭・灰の出土などはないが、その東横にて炭化面が確認された。また、北辺に接して短い溝や、東壁寄りに坑がみられるが、意味不明である。柱穴としてまとまるピットはない。住居跡の軸方向は、北辺は強く西に傾いている。

なお、住居跡内北東隅から1mほど中央寄りの床面にて、管玉1個が出土し、その他に石剣・砥石片があり、少量の土器も出土した。

3号住居跡

調査区の南端にて検出し、西辺が調査区外に延びていたが、拡張して全掘した。規模は 2.5×2.45 mと小型正方形であるが、一応住居跡として報告する。南辺はやや短い。深さは西辺側で17cmである。床面中央には径50cm、深さ6cmの浅い円形坑がある。炭・灰などの出土はなかった。また、ピットもあるが、まとまるものはない。遺物の出土はなし。

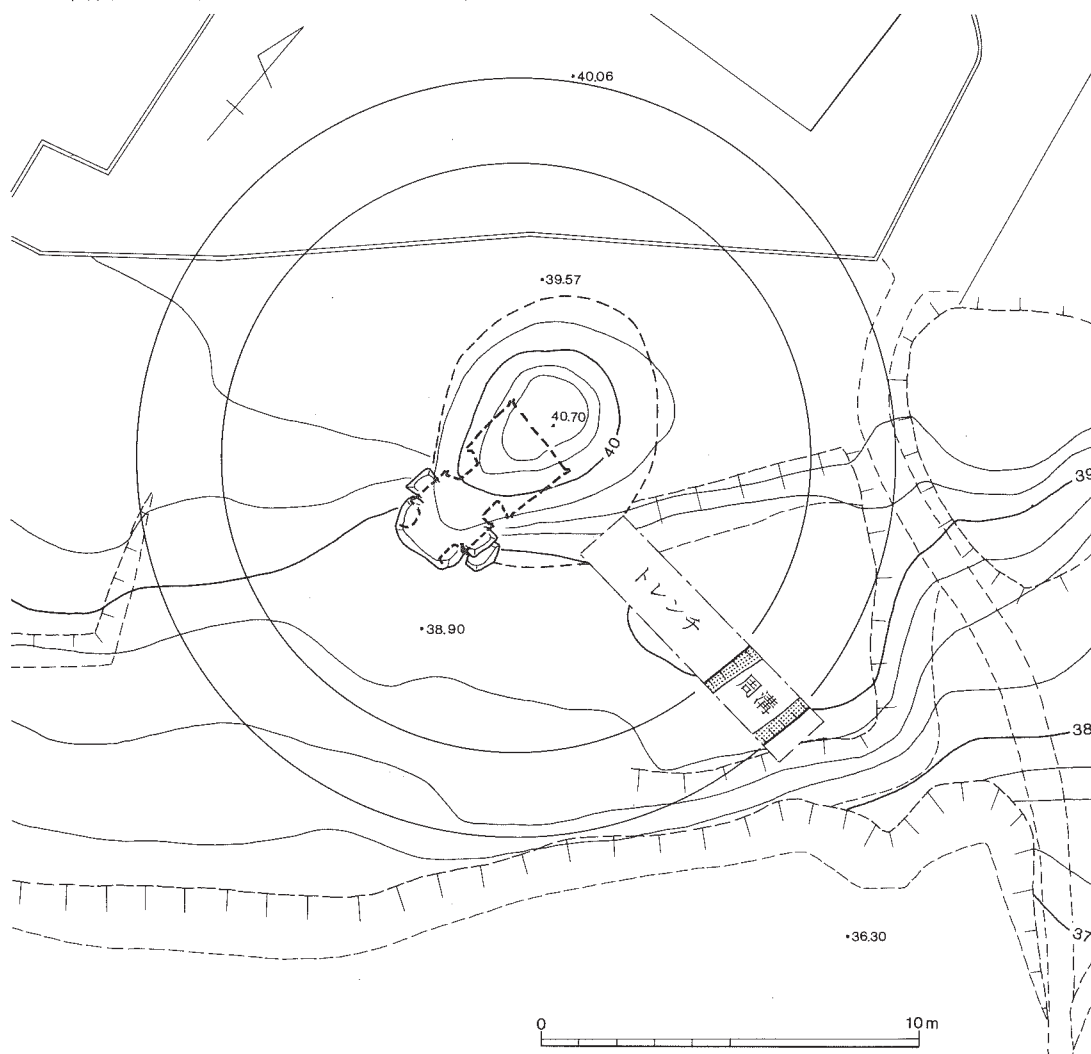


第7図 3号住居跡実測図 (1/60)

3 上の原古墳周溝

丘陵の南端に上の原古墳が所在していることは先に記した。古墳は横穴式石室を内部主体とする円墳であるが、墳丘の現状は、長径8m、短径6m、高さ1.2mの規模でしか残っておらず、石室入口の天井石もむき出しとなっている。

また、石室も開口し、内部には50～60cm程流入土が堆積している。『郷土田川』第21号（昭和38年刊）に石室略測図があり（第10図参照）それによれば、石室は全長約8m、玄室奥壁幅2.5mを測る複室の横穴式石室で、奥壁と側壁は花崗岩の一枚岩を使用している。石室入口は丘陵斜面側にあり、南向きに開口している。

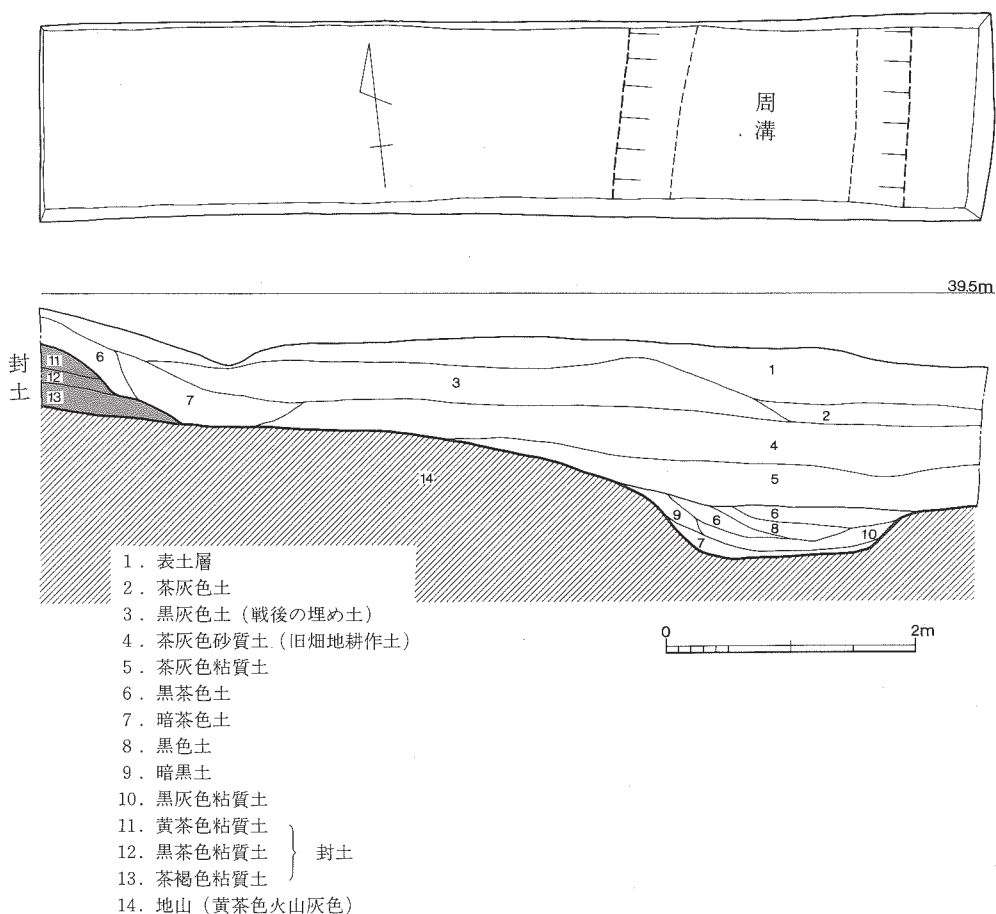


第8図 上の原古墳トレンチ配置図（1/200）

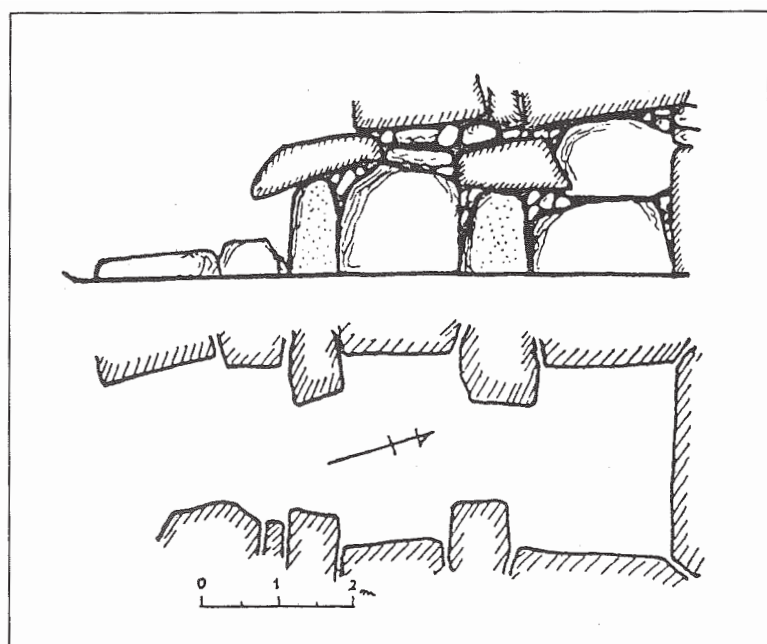
新設される道路は、現存する墳丘東裾から2mほど離れて計画されていたため、墳丘の規模と周溝の存在の確認を目的として、道路予定地内に長さ7.5m、幅1.5mのトレンチを東西方向に設定した。このトレンチの位置は玄室右側壁側にあたる。

調査の結果、現地表から60cm下で地山面に達し、トレンチ西端にて墳丘盛土の一部が、東半にて周溝が確認された。

墳丘の盛土は、トレンチ内では地山の上に50cmの厚さで見られ、水平に盛土していることが分かる。周溝は、上面幅2.3m、底面幅1.4m、深さ40cmを測り、断面は逆台形状となる。周溝内は、墳丘側からの流入土が黒色土を主体に5～6枚堆積し、弥生土器片が含まれていたが、古墳に伴う遺物の出土はなかった。



第9図 上の原古墳周溝土層図（1／60）



第10図 上の原古墳石室実測図（1／100）

4 出土遺物

今回の調査で、貯蔵穴と住居跡から出土した遺物はすべて弥生時代に属するもので、前期後半から後期末頃までの長期にわたる。その中では中期のものが圧倒的に多い。

(1) 土器

1号貯蔵穴（第11図1～6）

1は壺口縁で、黄褐色～淡赤褐色を呈し、1～2mm大の長石、石英粒を多く含む。内外面ともナデ調整である。2はミニチュア甕形土器で、黄褐色～橙黄褐色を呈し、微砂粒を多く含む。内外面ともナデ調整である。3の鉢は黄灰褐色を呈し、1mm内外の石英粒をやや多く含む。内面はナデ調整で、外面はハケ目の上をミガキ調整している。4の甕は黄褐色～橙黄色を呈し、口縁部から肩部にかけて黒斑がある。胎土には1～2mm大の石英・長石粒を多く含む。5の甕は黄褐色～橙褐色を呈し、1～2mm大の石英・長石粒を多く含む。器面が荒れており、調整は不明である。6は台付甕または鉢の脚部で、灰褐色を呈し、精良な胎土である。外面は細かいハケ目で調整されている。これらの土器は前期末から中期初頭にかけての時期のものである。

2号貯蔵穴（第11図7・8、第12図、第13図10）

7の鉢は黄褐色を呈し、1～2mm大の石英粒と微砂粒を若干含む。内外面ともミガキ調整されているが、外面のミガキは粗い。8はいわゆる如意形口縁の甕で、黄褐色～橙黄褐色を呈し、0.5～2mm大の石英・長石粒を多く含む。胴部上半に黒斑がある。外面胴部はハケ目調整で、他の部分はナデ調整されている。9は大形の壺で、色調は黄褐色を呈し、胴部下半に黒斑がある。胎土には1～3mm大の石英・長石粒を多くと、黒雲母を若干含む。胴部外面下半には粗いハケ目が残るが、他の部分はナデ調整されている。

10の壺は、大きさは異なるが、器形的には9と良く似ている。外面は口縁部を除いてミガキ調整されており、口縁部および内面はナデ調整である。時期は、前期後半である。

4号貯蔵穴（第13図11・12）

11の甕は外面が暗褐色、内面が淡赤褐色を呈し、1～4mm大の石英、長石、黒雲母等を含む粗い胎土である。器面が荒れているので調整は不明である。12は小型の高杯で、赤褐色のスリッブが塗られており、胎土は橙褐色を呈する。口縁端部に黒斑が廻っている。内外面ともナデ調整である。時期は前期後半である。

6号貯蔵穴（第13図13～16、第14図、第15図27～31）

13の高杯は淡黄褐色を呈し、内外面とも丹が塗られている。胎土には白色の微砂粒を若干含むが、全体として精良である。内外面ともナデ調整されている。14の大型壺はやや赤味を帯びた淡黄褐色を呈し、胎土には1mm内外の石英、長石粒を多く含む。外面は横方向の粗いミガキが施され、口縁部および内面はナデ調整である。15の壺は淡赤色を呈し、微砂をやや多く含む。

が、全体としてきめ細かい胎土である。口縁部にミガキが認められるが、その他の部分については調整不明である。16は高杯脚部で橙黄褐色を呈し、0.5mm前後の微砂粒を若干含む。外面は縦方向のミガキが施されている。17の甕は淡赤褐色を呈し、1mm内外の砂粒を多く含む粗い胎土である。内外面ともナデ調整である。18の甕底部は黄褐色を呈し、0.5mm内外の砂粒を含む。外面はハケ目、内面はナデ調整である。19の甕も黄褐色を呈し、1mm内外の石英、長石粒を多く含む。外面ハケ目、内面ナデ調整である。20の甕底部も色調は黄褐色で、0.5mm内外の石英、長石粒を多く含む。外面ハケ目、内面ナデ調整である。21の壺は黄褐色を呈し、部分的に赤味が強くなっている。0.5mm内外の石英等の砂粒を多く含む、頸部内面にミガキが施され、それ以外はナデ調整である。肩部に突帯が廻る。22の壺も頸部内面にミガキが施されている。口縁部および外面は器面が荒れており、調整は不明である。色調は黄灰色で、淡紅色のスリップをかけている。23の壺は淡赤褐色～灰色を呈し、1mm内外の砂粒を多く含む。外面ナデ調整で、内面は器面が荒れているので不明である。24の壺は灰褐色を呈し、1mm内外の砂粒を多く含むやや粗い胎土である。外面ナデ調整で、内面および口縁部は調整不明である。25の高杯は黄褐色を呈し、口縁端部に黒斑がある。0.5mm内外の砂粒を多く含む粗い胎土で、口縁部上面はナデ調整、それ以外の部分は調整不明である。26の高杯は淡橙黄色を呈し、0.5mm内外の砂粒をやや多く含む。口縁部がナデ調整されている他は、内外面ともミガキ調整されている。27の大型壺は外面黄褐色、内面暗灰色を呈し、石英等の0.5mm内外の砂粒を多く含む。口縁部内面のみヘラミガキ、その他はナデ調整である。28は小型の直口壺で、口縁部下に突帯が1条廻る。色調は淡黄灰色で、0.5mm前後の砂粒を多く含む。調整は不明である。29の高杯脚部は淡黄褐色で0.5mm前後の微砂粒を若干含む。外面はミガキ調整で、内面にシボリ痕が残る。30は蓋形土器で、淡黄褐色を呈し、0.5mm大の砂粒を多く含む。外面は細かいハケ目調整で、つまみ部分はナデ調整、内面は調整不明である。31は大型の甕で、口縁下に突帯が1条廻る。黄褐色～橙褐色を呈し、0.1～0.2mm大の石英・長石粒を多く含む。外面は粗いハケ目、内面および口縁部はナデ調整である。時期は中期の中頃である。

7号貯蔵穴（第15図32・33、第16図34～36・38・40、第17図41・42）

32の甕底部は淡黄灰色を呈し、微砂粒を若干含むが、精良な胎土である。外面ハケ目、内面ナデ調整である。33の壺は黄褐色～黄灰色を呈し、微砂粒を若干含む。頸部内面のみをミガキ調整し、それ以外はナデ調整である。口縁部上面に丹塗している。34の大型壺は淡赤褐色～黄褐色を呈し、内面の一部が暗灰色である。0.5mm前後の砂粒をやや多く含む。内外面ともナデ調整である。35は肩部に綾杉文を施した壺で、淡赤褐色を呈し、1～3mm大の粗砂粒を若干含むが、全体として精良な胎土である。内外面ともナデ調整されているが、胴部外面にハケ目が残っている。36の甕は淡黄灰褐色を呈し、1～4mm大の粗砂・小石を多く含む。内外面ともナデ調整であるが、外面胴部にハケ目が一部残っている。38の甕底部は淡黄灰色を呈し、外面に黒斑

がある。1～4mm大の石英粒を若干含むが、全体として精良な胎土である。外面ハケ目、内面ナデ調整である。40の甕底部は暗褐色を呈し、0.5～1mm程度の白色砂粒を多く含む。内外面ともナデ調整である。35・36が前期後半、他は中期前半のものである。

8号貯蔵穴（第16図37・39）

37の壺は褐色を呈し、0.5～1mm大の石英等の砂粒を多く含む。内面はナデ調整で、外面は調整不明である。39はミニチュアの壺形土器で、黄褐色を呈し、黒雲母等の微砂粒を含む。内外面ともナデ調整である。時期は前期末頃である。

9号貯蔵穴（第17図43）

43の鉢は黄褐色を呈し、内面口縁部近くに黒斑がある。3～5mm大の石英等の粗砂を多く含む。内外面ともナデ調整である。時期は中期前半であろう。

1号住居跡（第18図44）

44は、外面淡赤褐色、内面灰褐色を呈し、肩部に黒斑がある。1mm内外の石英粒等をやや多く含む。内外面ともナデ調整である。後期末のものである。

2号住居跡（第18図45）

45は淡黄灰色を呈し、肩部に黒斑がある。1mm内外の石英粒等をやや多く含む。内外面ともナデ調整である。時期は後期後半～末であろう。

ピット4（第18図46）

46は外面褐色、内面黒色を呈し、1～2mm大の石英・長石等の粗砂をやや多く含む。口縁部に刻目があり、外面はハケ目調整、内面および口縁部はナデ調整である。時期は前期後半である。

(2) 石器

石皿（第18図47）

47は4号貯蔵穴出土の石皿で、図示した面の中央部が磨耗している。石材は砂岩である。

砥石（第18図48、第19図60～62）

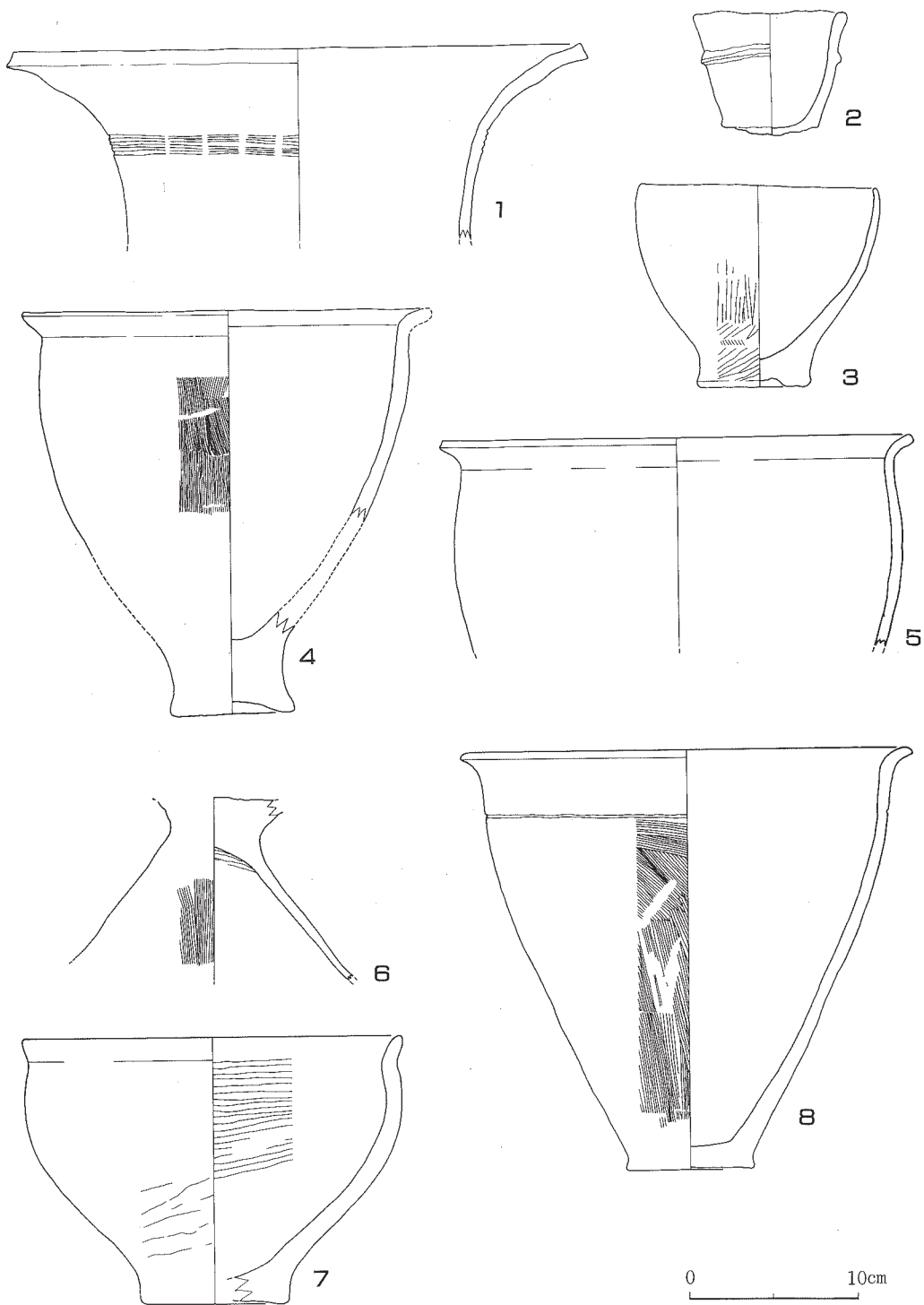
48は3号貯蔵穴、60～62は2号住居跡から出土。48は砂岩製の荒砥である。60～62は緑灰色の粘板岩製で、仕上げ用の目の細かいものである。

石包丁（第19図49・50・52）

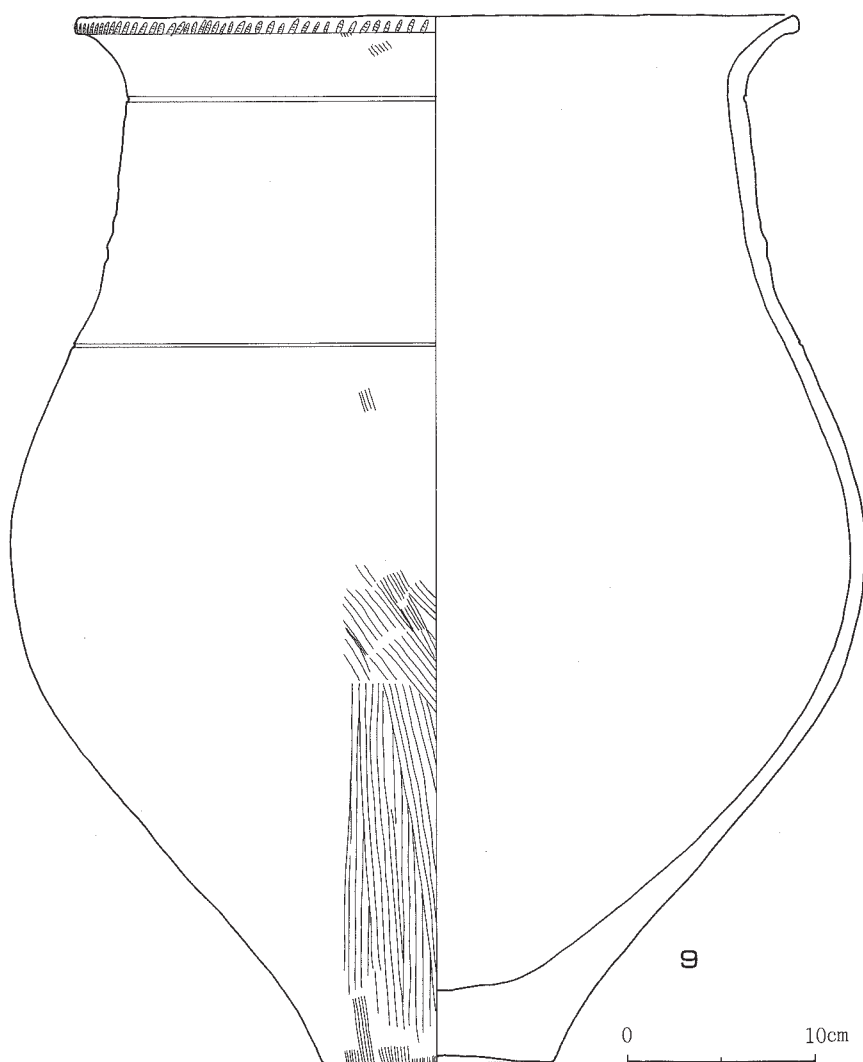
49・50は1号貯蔵穴出土。49は青灰色の粘板岩製で、粗い調整痕が残る。50は灰色の粘板岩製で、表面が膜状に剝離している。52は4号貯蔵穴からの出土で、小豆色を呈する輝緑凝灰岩製である。

石包丁未製品（第19図51・53）

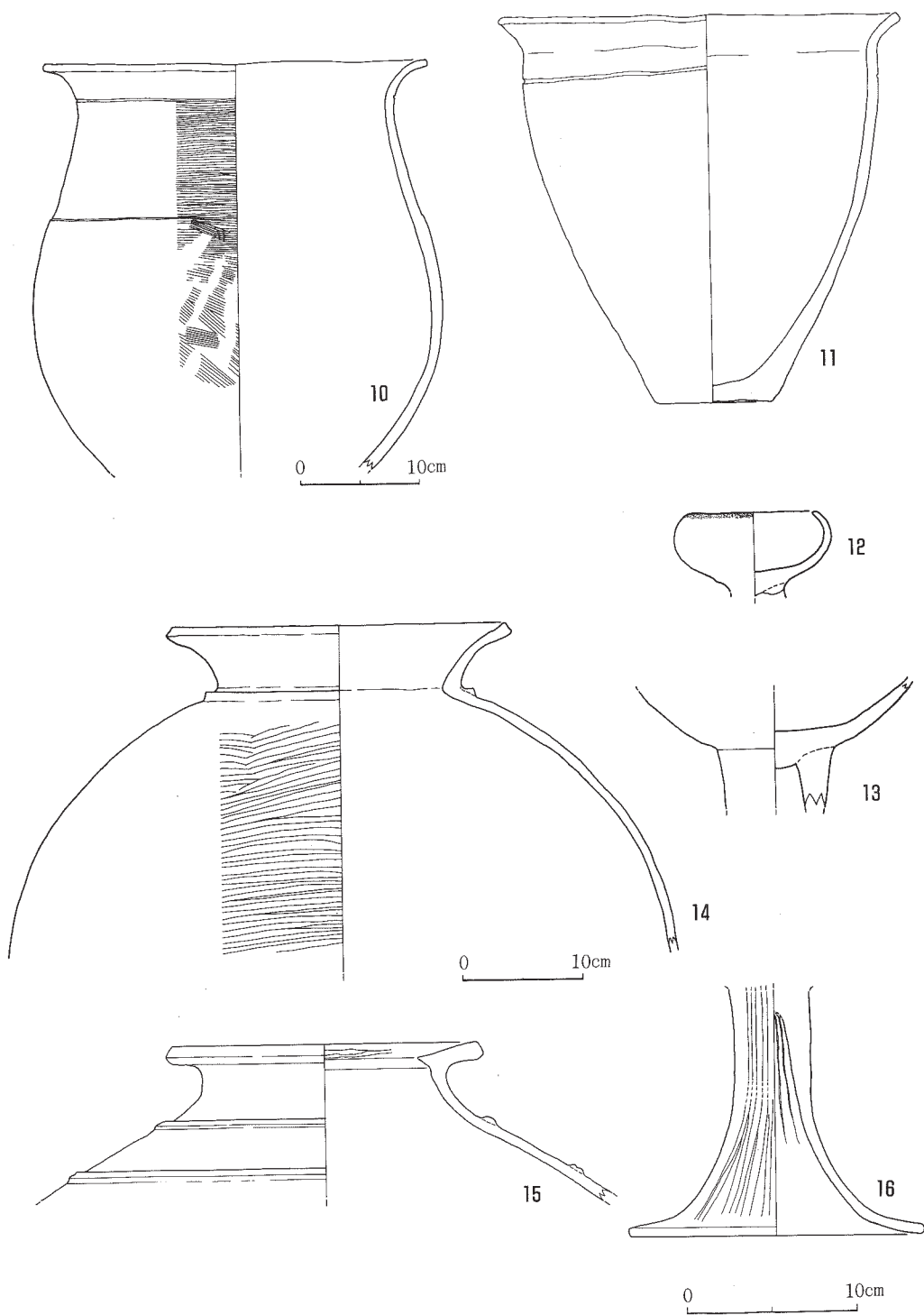
51は4号貯蔵穴出土。53は7号貯蔵穴出土。青灰色を呈し、片岩系の石材である。形状から石包丁未製品と考えたが、石材からみて、打製石斧の破損品の可能性もある。



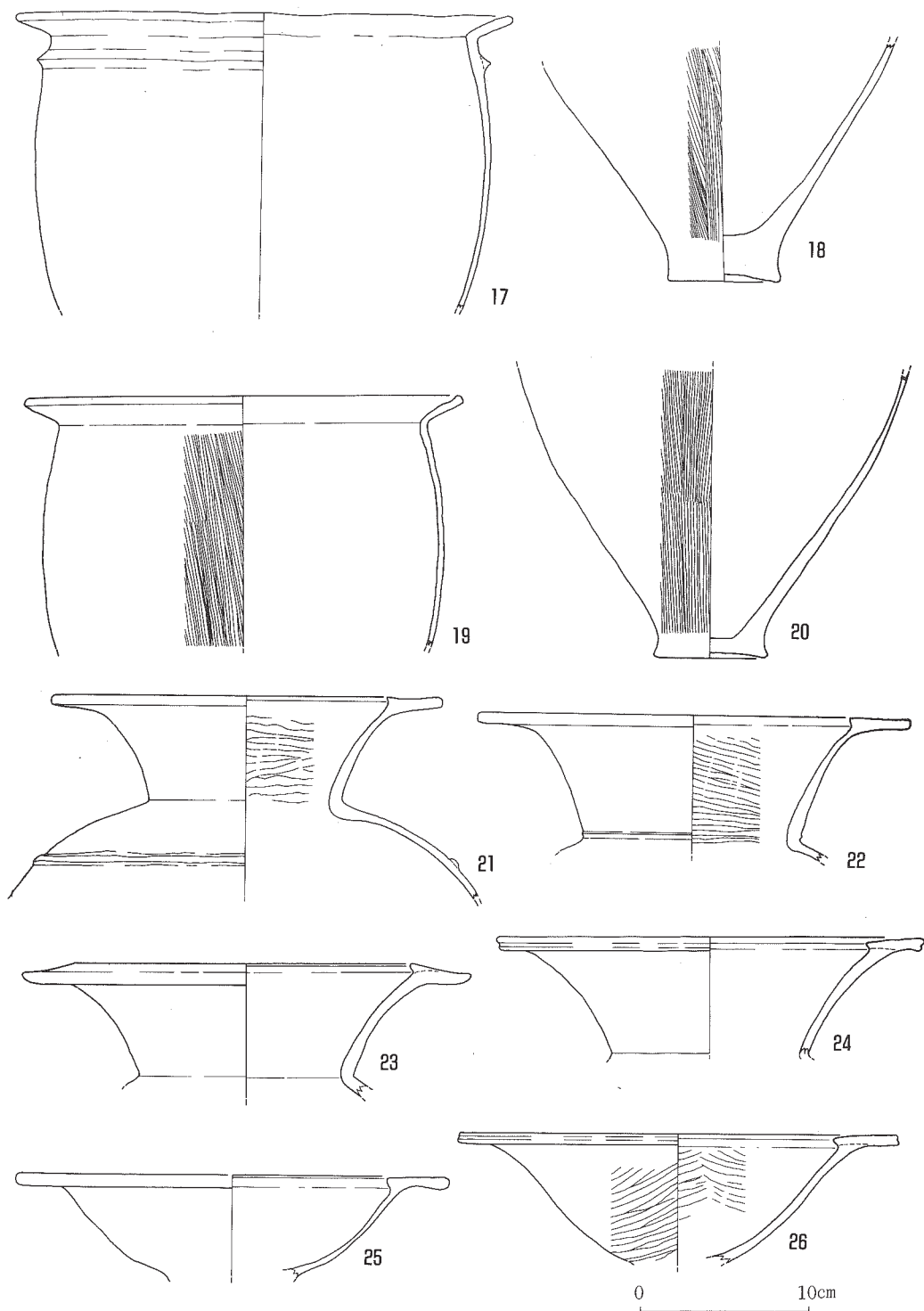
第11図 上の原遺跡出土土器1 (1/4)



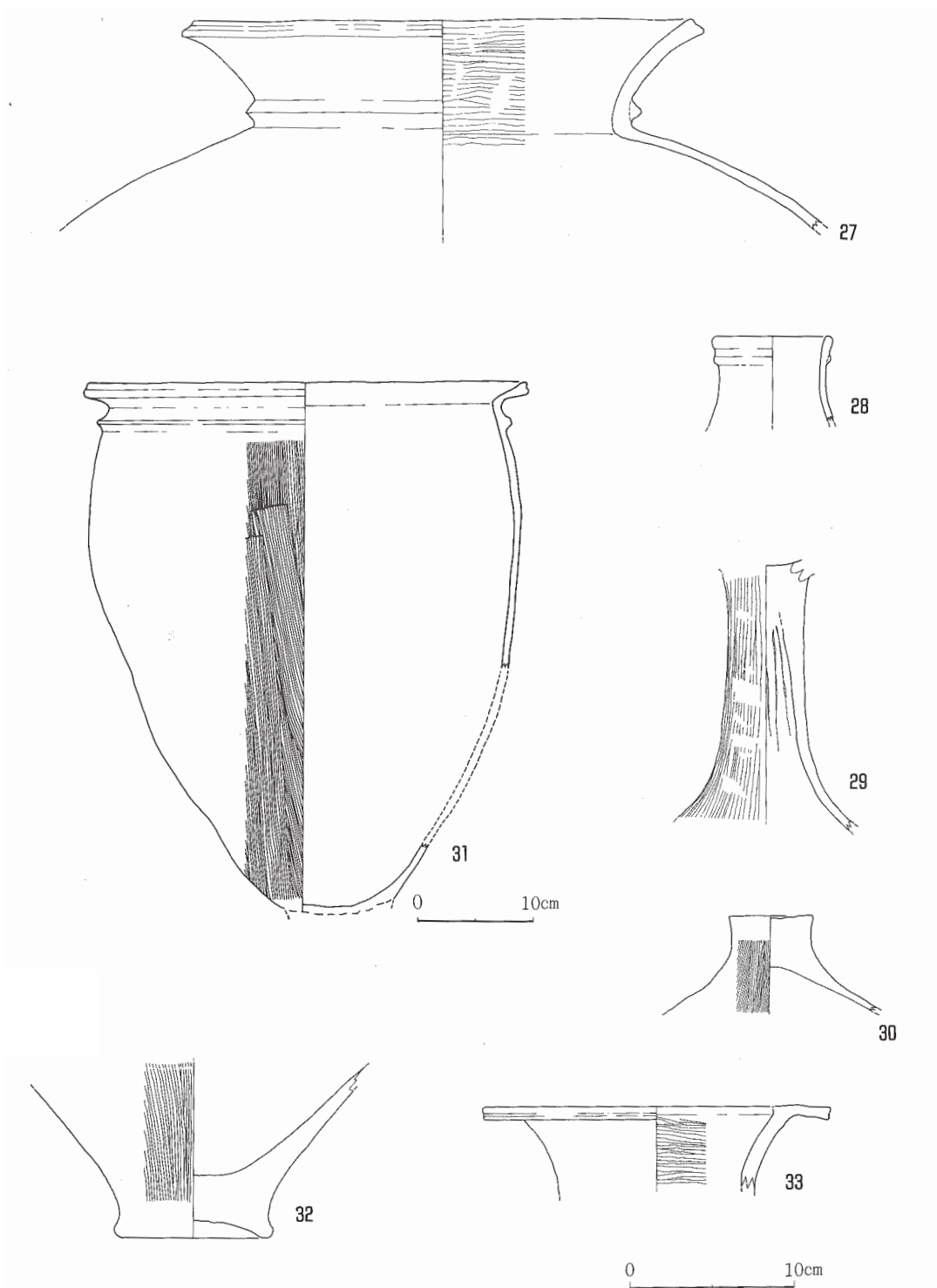
第12図 上の原遺跡出土土器2 (1 / 4)



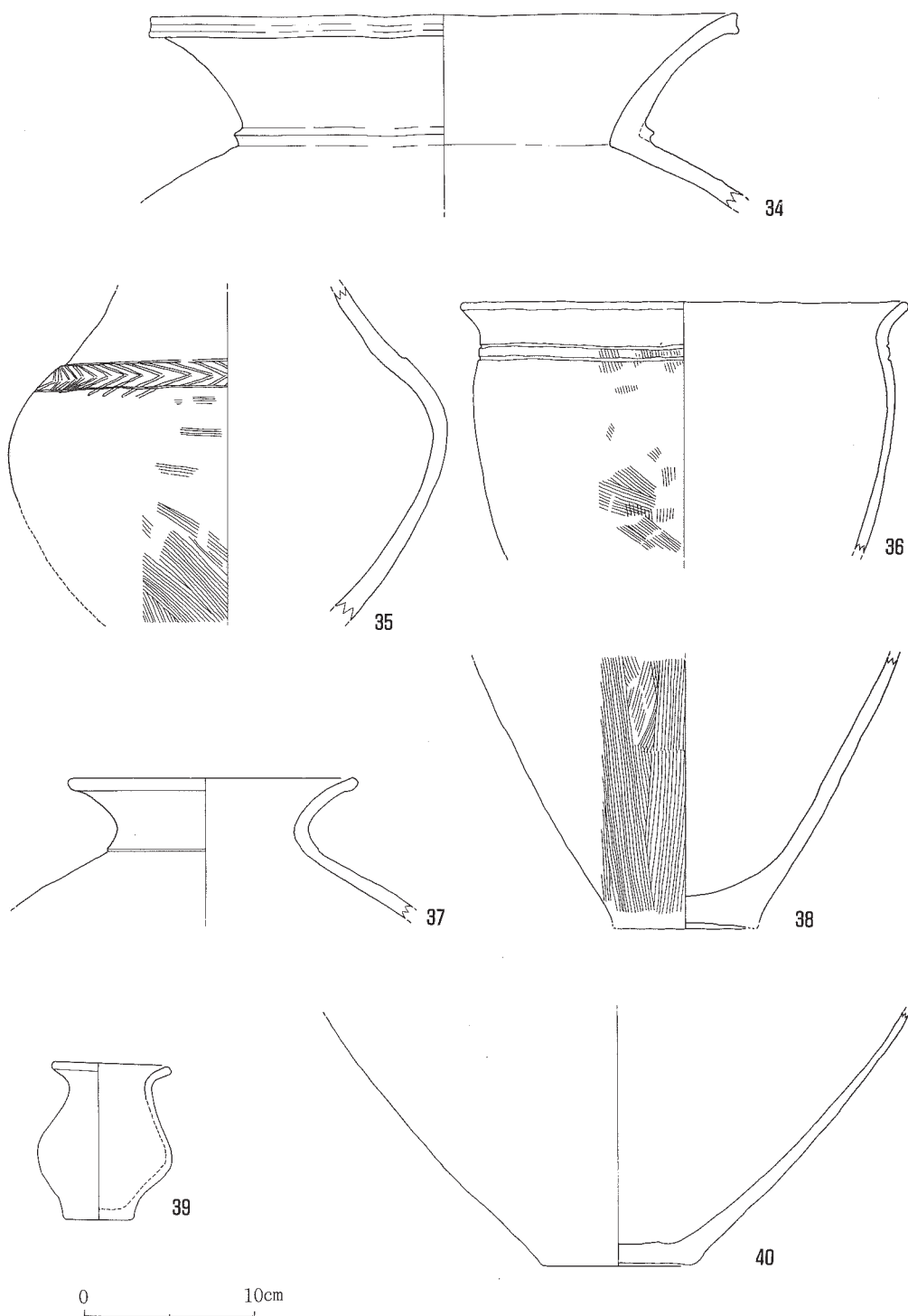
第13図 上の原遺跡出土土器3 (10、14を除き1/4)



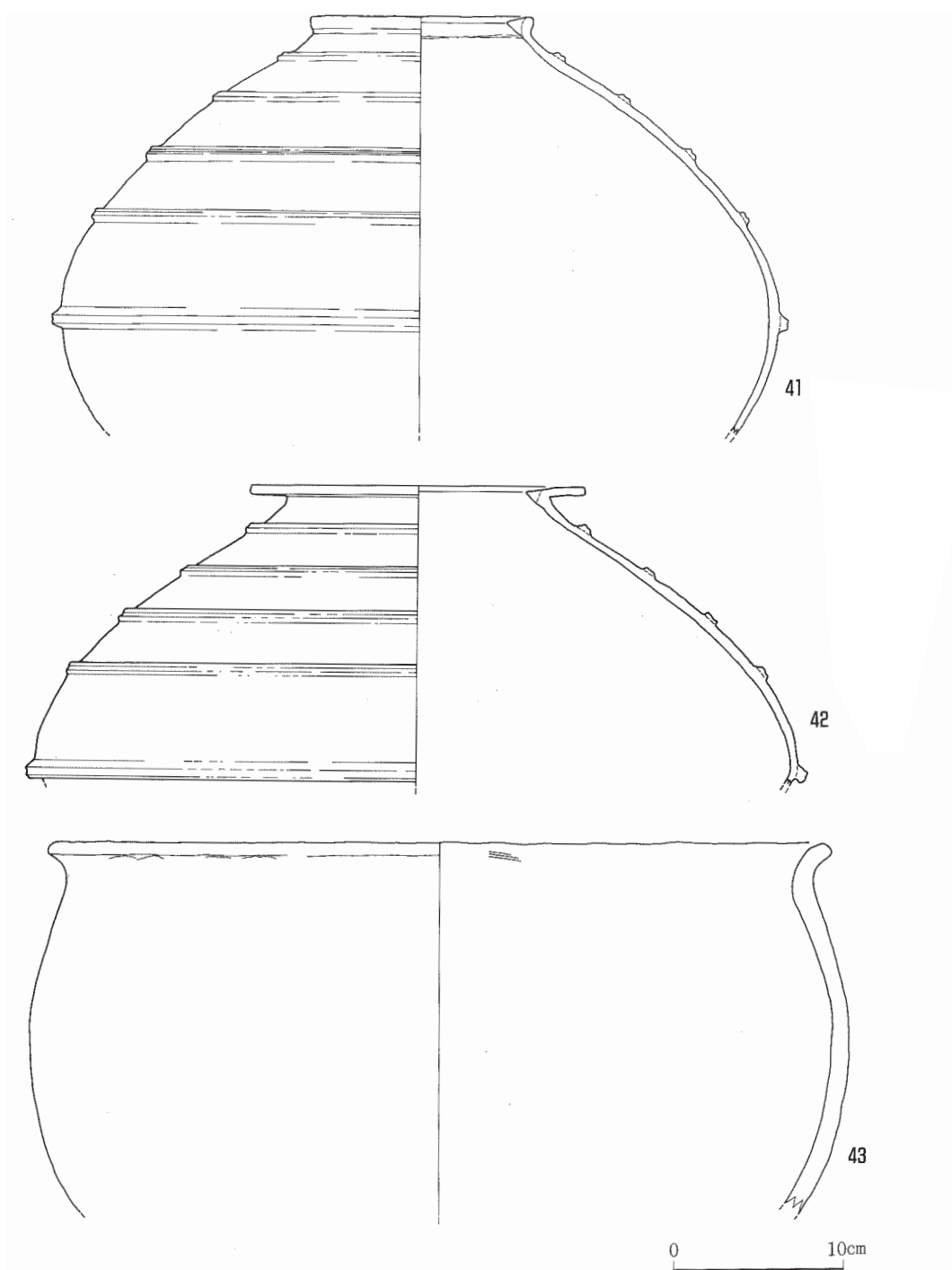
第14図 上の原遺跡出土土器4 (1/4)



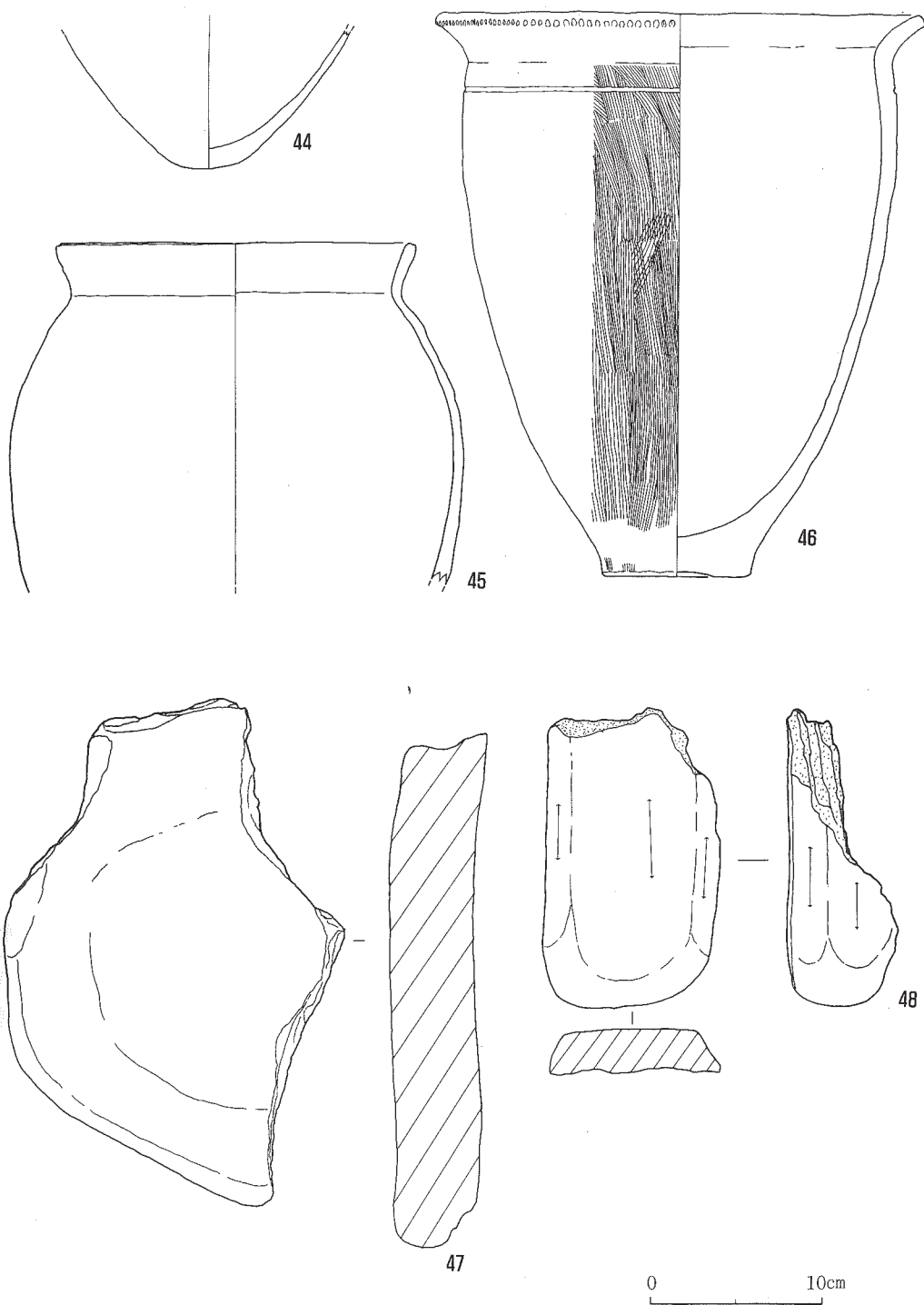
第15図 上の原遺跡出土土器5 (31を除き1/4)



第16図 上の原遺跡出土土器6 (1/4)



第17図 上の原遺跡出土土器7 (1/4)



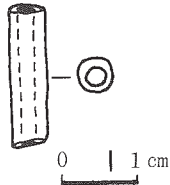
第18図 上の原遺跡出土土器・石器 (1/4)



第19図 上の原遺跡出土石器 (1/4)

打製石斧（第19図54～57）

54は8号貯蔵穴、55・56は1号貯蔵穴出土で、淡青灰色を呈する泥質片岩製である。57は2号住居跡出土で刃部が磨耗している。石材は泥質片岩である。



磨製石斧（第19図58・64）

58は2号住居跡出土で、刃部が欠損している。明灰色を呈する泥岩質の石材で、表面の風化が著しい。64は7号貯蔵穴より出土。暗灰色と明灰色が混じる砂岩製である。

台石（第19図59）

敲石の台石で、敲打痕が上面に見られる。黄灰色の粒子の粗い砂岩である。

磨製石剣（第19図63）

2号住居跡から出土。明灰色に暗灰色の縞が入る粒子の細かい砂岩製で、紐通しの孔がある。刃部は欠けているが、復元すると幅3cm前後になる。断面形は菱形で、明瞭な鎗稜を有する。

管玉（第20図）

2号住居跡から出土。暗緑色の碧玉製で光沢がある。1点だけの出土である。長さ18mm、径4.7mm前後、内径2mm前後である。

VI まとめ

今回の調査では、弥生時代の前期後半から中期中頃にかけての貯蔵穴群と、後期の住居跡群を検出した。また、遺跡の南端に所在する上の原古墳の周溝の一部を確認した。

貯蔵穴は9基あり、いずれも平面は円形、断面は袋状となるもので、底面にピットや周溝を有するものもあるが、北部九州では普遍的に見られるものである。出土土器はいわゆる下伊田式から須玖式土器にかけてのもので、中期になると福岡平野地方の影響が強くなるかがわかれた。

住居跡は3軒あり、当地方では弥生時代後期の時期の発掘例は少ない。また、住居跡内からの管玉の出土も当地では初出である。

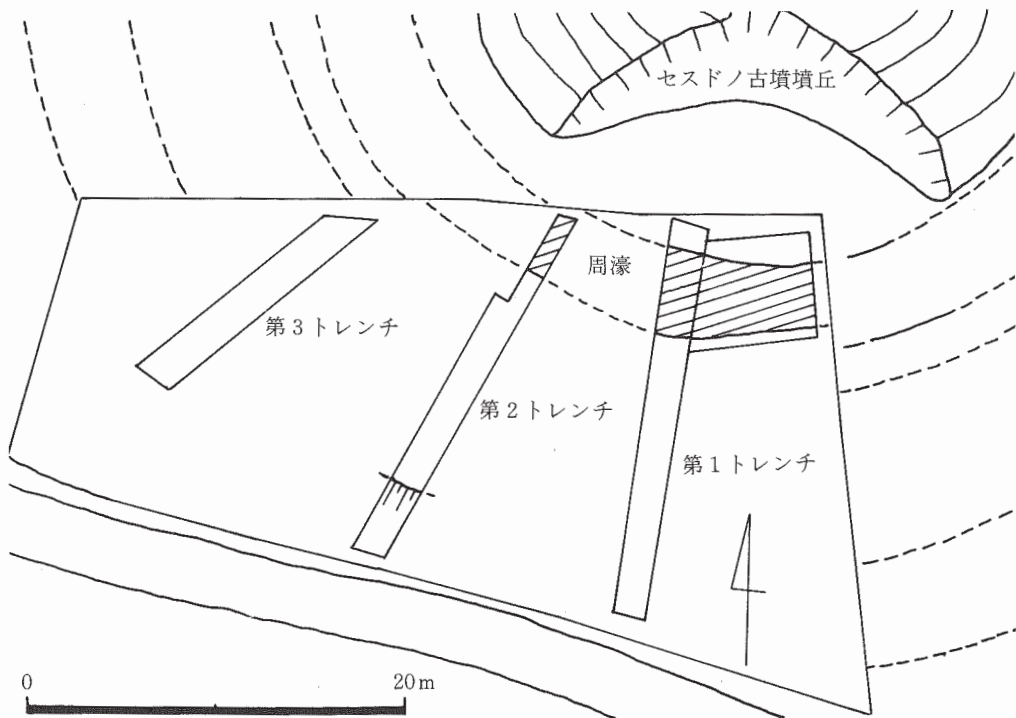
上の原古墳は6世紀末頃の複室横穴式石室である。調査では、2.5m幅の周溝の一部を確認し、墳丘径15.5m、周溝を含めると径20mの規模の古墳が確認された。

以上、今回の調査は小規模ではあったが、上記のような多大の成果をあげることができた。

付、セスドノ古墳周濠部の調査

I 調査に至る経過

セスドノ古墳は、田川市大字伊田3847-1 他（通称東町）に所在する。昭和44年の住宅建設の際に横穴式石室が露出し、緊急発掘調査が行われている（註1）。石室内は全く盗掘を受けておらず、短甲や刀剣類、馬具などの鉄器類をはじめ、多数の副葬品が出土した。古墳は、調査後福岡県指定史跡に指定され、石室の埋めもどしと墳丘を若干縮小しての復元整備が行われた。この調査の際に、古墳の周囲を周濠が廻っていることが確認されたが、東側はこれ以前の住宅建設で破壊されており、南側の今回調査地点にもすでに市立病院の医師住宅が建っていたため、これらの部分については指定の範囲から除外されていた。平成2年度に医師住宅の建て替えが計画されていたため、担当部局と協議した結果、工事に先だって破壊される恐れのある部分について発掘調査を行い、記録を残すことになった。調査費用は市立病院が負担し、発掘調査は田川市教育委員会文化体育課が行い、文化係主事田代健二が担当した。調査期間は平成2年7月26日から8月5日までで、調査面積は約1,100㎡である。



第21図 セスドノ古墳調査区平面図（1／400）

調査関係者は次のとおりである。

総括 田川市教育委員会 教育長

庶務

文化体育課長

〃 課長補佐

石炭資料館主任

〃 主事

調査担当

〃 主事補

角 銅 圓

高 村 三 也

平 賢 一

橋 岡 佑 子

森 本 弘 行

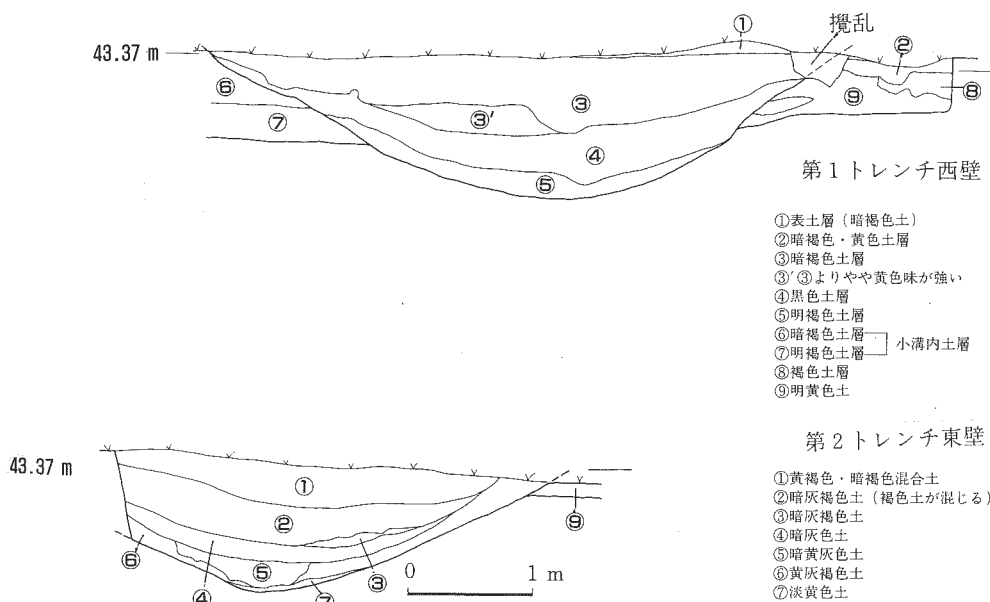
田 代 健 二

なお、調査に際して、筑豊教育事務所技術主査新原正典氏にご指導ご助言をいただいた他、多くの方々にご協力いただいたことを記して感謝の意を表したい。

II 調査の概要

今回の調査地点は、住宅建設の際に若干削平を受けており、墳丘部分はすでに破壊されていたため、主として周濠と周堤の検出に調査の重点を置いた。今回の住宅建設の際に破壊される部分について古墳の中心から放射状になるように3本のトレンチを設定し、遺溝検出にあたった。これらのトレンチのうち、第1・第2トレンチで周濠を検出した。第3トレンチは周濠の外側になっていたため周濠にはあたらなかった。

各トレンチとも表土直下が地山になっており、周堤の盛土は見られなかった。すでに削平されて消滅したものと思われる。



第22図 周濠断面図 (1/60)

第1トレンチ

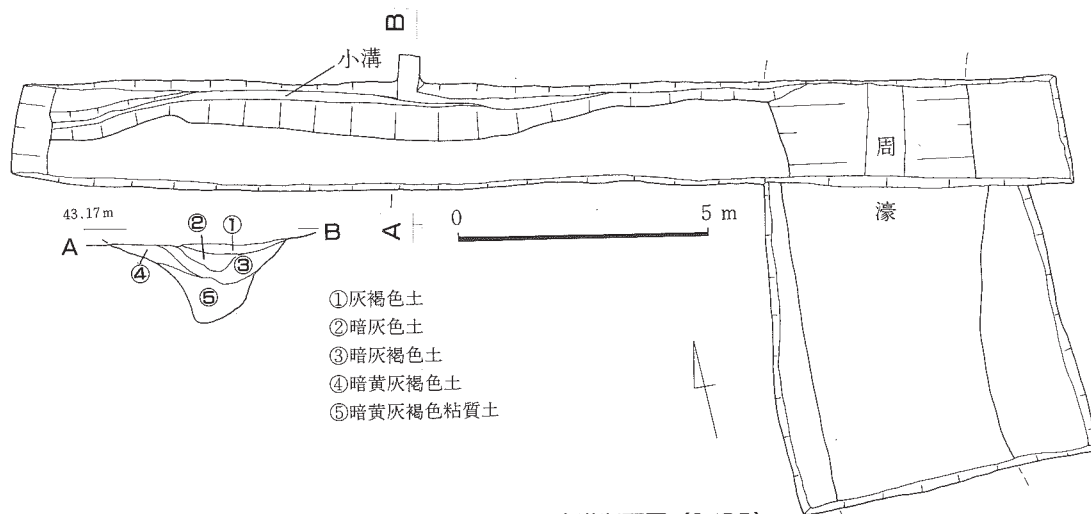
調査区の最も東よりの部分に幅2mのトレンチを南北に設定した。表土を除去した段階で、トレンチ西端部で周濠を検出した。トレンチにかかった周濠部分の掘り下げ後、東側にグリッドを拡張し、周濠の延長を確認した。周堤はすでに削平されており、検出されなかった。周濠は明黄褐色の地山を掘って作られており、断面形はゆるやかなV字形を呈する。検出面で幅約4.7m、検出面から底部までが0.9m前後あり、濠内はレンズ状堆積の埋土で埋まっている。埋土中からは円筒埴輪片が出土した。

周濠と直行する方向に、幅0.7m前後の小溝がのびているのが検出された。調査区内は地表面が北から南に向かって下がっており、小溝はその傾斜に沿って掘られている。埋土中からは土器小片が出土したが、時期の判定はできない。この溝は周濠に切られており、古墳築造以前のものである。

第2トレンチ

第1トレンチの南側に同じく幅2mのトレンチを設定して表土を除去したところ、遺溝にあたっていなかった。さらに北側の調査区端まで幅1mのトレンチを延長し、周濠を検出した。周濠の北側肩部は調査区外であったため、調査できなかったが、底面は確認できた。周濠内は第1トレンチとほぼ同様の堆積状況を呈している。埋土中からは埴輪片と須恵器が出土した。須恵器は平安時代後半頃の瓶子で、この頃までは周濠が埋まりきっていなかったであろう。周堤はここでも検出されなかった。

第1・第2トレンチで検出された周濠をつなぐことによって、前回の調査によって予想されたとおり周濠が廻ることを確認できた。



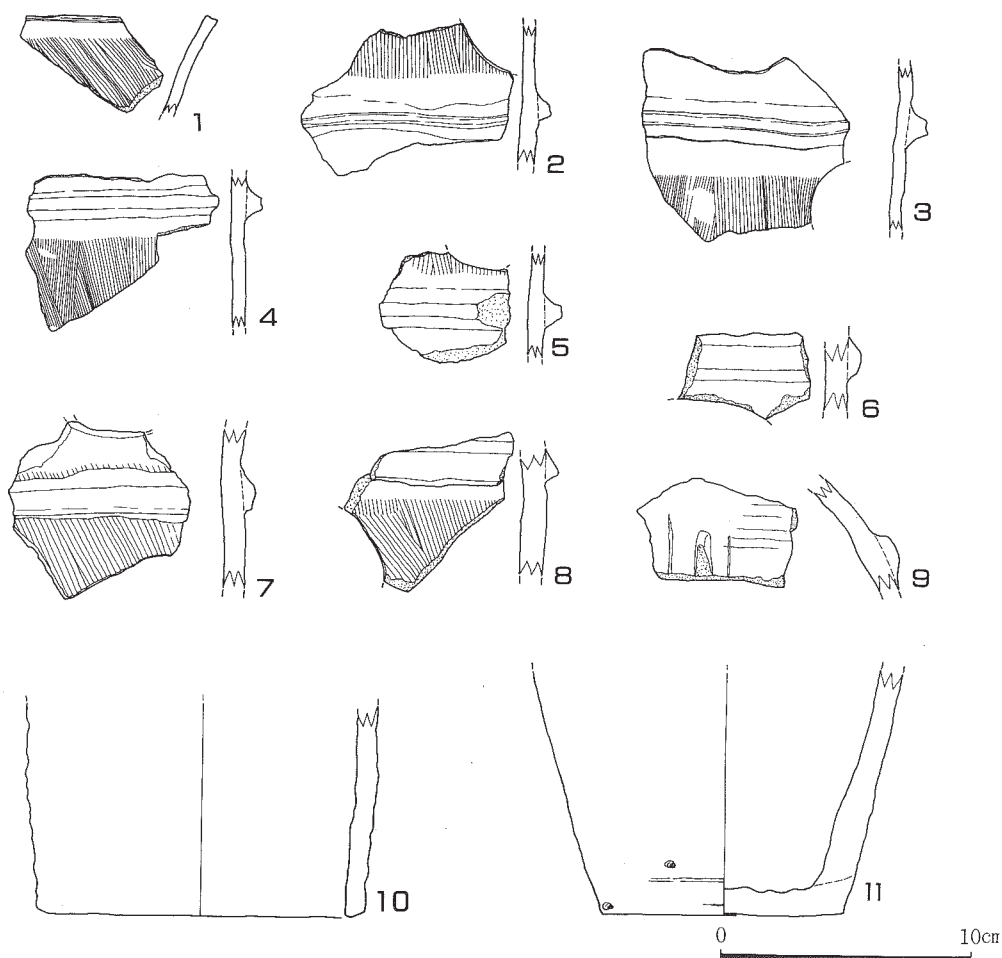
第23図 第1トレンチ平面図 (1/150)、小溝断面図 (1/60)

Ⅲ 出土遺物

周濠内からは埴輪片が主に出土した。全形が復元できるものはないが、タガの形状から次の3類型に分類できる。

A類 (第24図1～5)

断面が高い台形を呈するもので、外面は縦方向のハケ目、内面はナデで調整されている。焼成は堅緻で、5は須恵質に近い。色調は淡黄褐色～橙黄色で、0.5mm前後の砂粒を若干含むが全体として精良な胎土である。口縁部片は胎土や色調からみてA類のものと思われる。器壁は非常に薄くつくられており、ていねいな作りである。10の基部破片も胎土・色調からみてA類と思われる。表面が荒れており、調整は不明である。



第24図 セストノ古墳周濠内出土遺物 (1/3)

B類（第24図6・7）

タガの断面形が低平な台形を呈するもので、A類と比較してやや器壁が厚く、色調も赤みが強い。胎土には砂粒が多く、粗い印象を受ける。外面は縦方向のハケ目、内面はナデ調整である。

C類（第24図8）

タガの断面形が丸みを持った三角形を呈するもので、半円形に近いものもある。胎土や色調はB類に近い。外面はハケ目調整、内面はナデ調整である。器壁はやや厚めである。

透かし孔の形状は円形のみで、方形・三角形はみられない。また、図示はしていないが基部の破片で内面にも一部ハケ目の残るものもある。ここで出土した埴輪は全体として小型である。

9・11は第2トレンチ周濠内出土の須恵器である。色調は暗灰色で粗砂を若干含む。やや粗い胎土である。9・11は同一固体と思われ、肩部に耳を付けた瓶子であろう。焼成は須恵質で堅緻である。時期は平安時代後半と思われる。

註1 『セストノ古墳』田川市文化財調査報告書 第3集 田川市教育委員会 1984

版 圖



遺跡遠景（南から）



遺跡全景（西から 後に見えるのは香春岳）



遺跡全景（発掘前 南から）



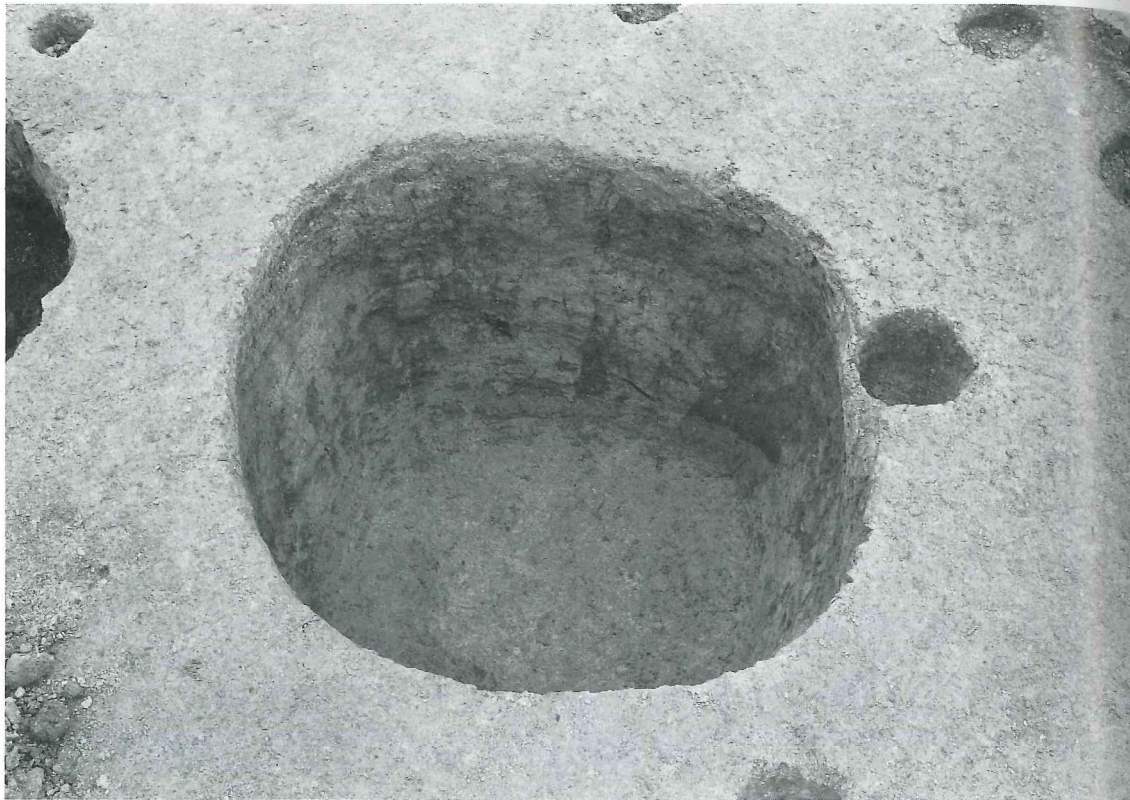
遺跡全景（発掘後 南から）



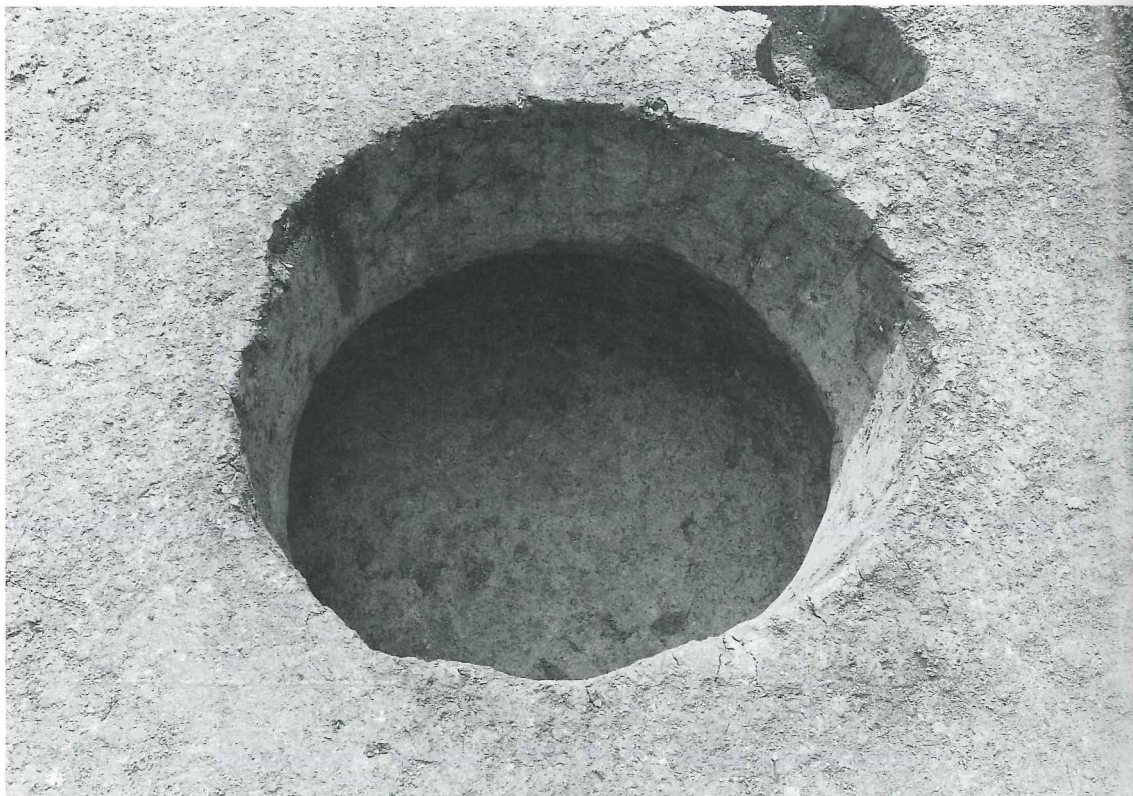
1号貯蔵穴



4号貯蔵穴



5号贮藏穴



8号贮藏穴



6号貯藏穴 底面周溝



2号貯藏穴 遺物出土状態



1号住居跡（南から）



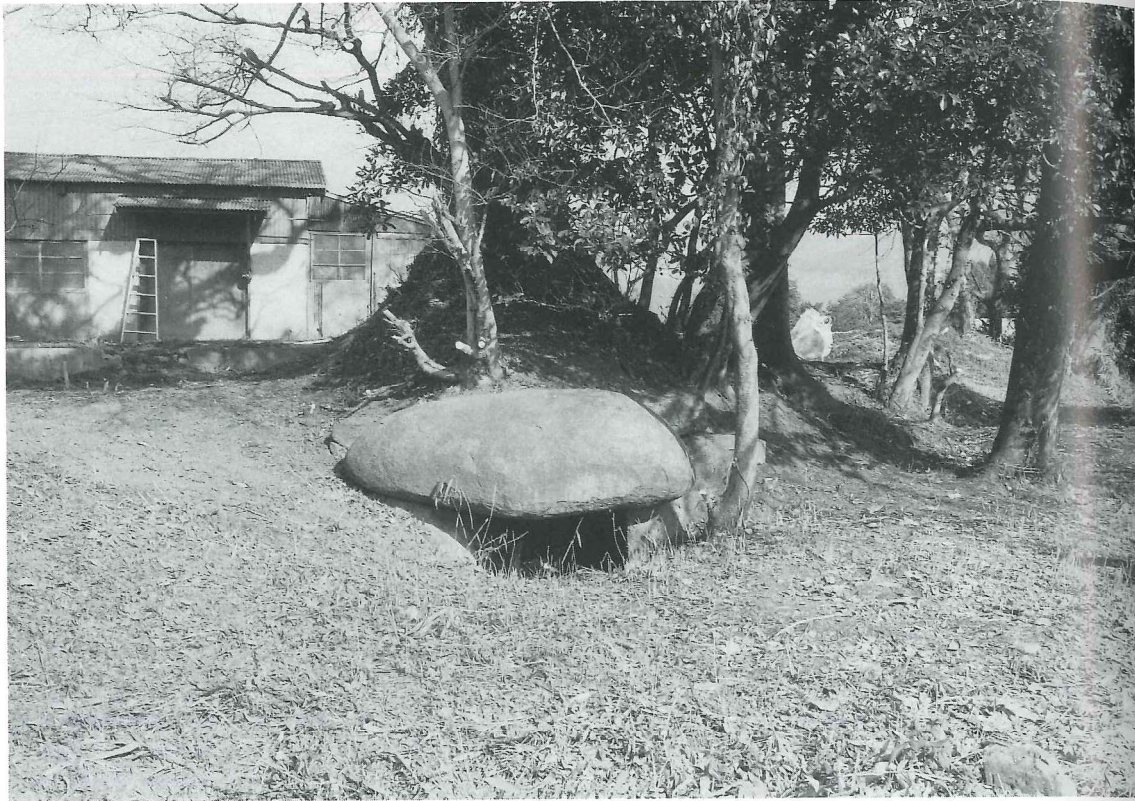
3号住居跡（東から）



2号住居跡（南から）



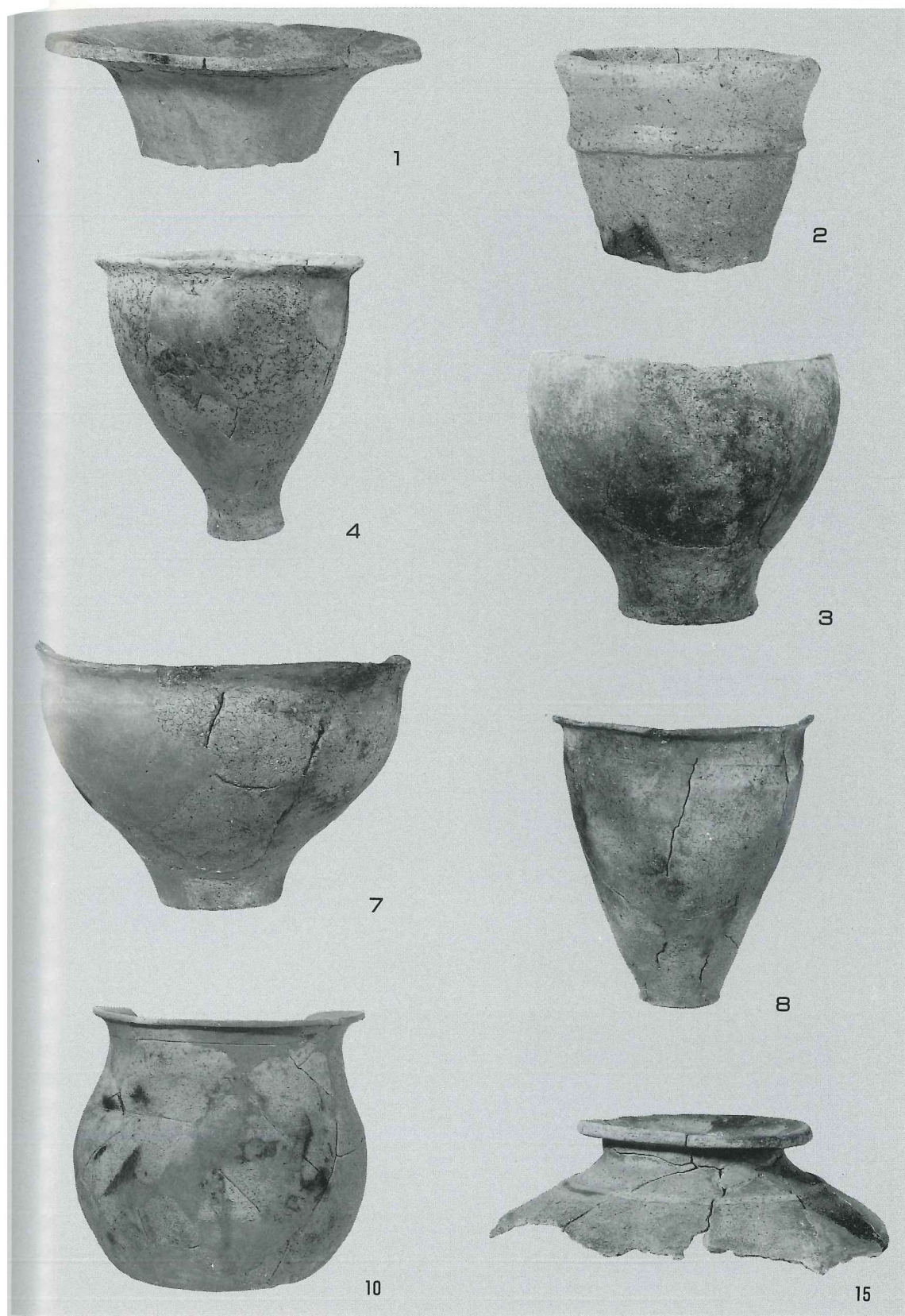
2号住居跡内管玉出土状態



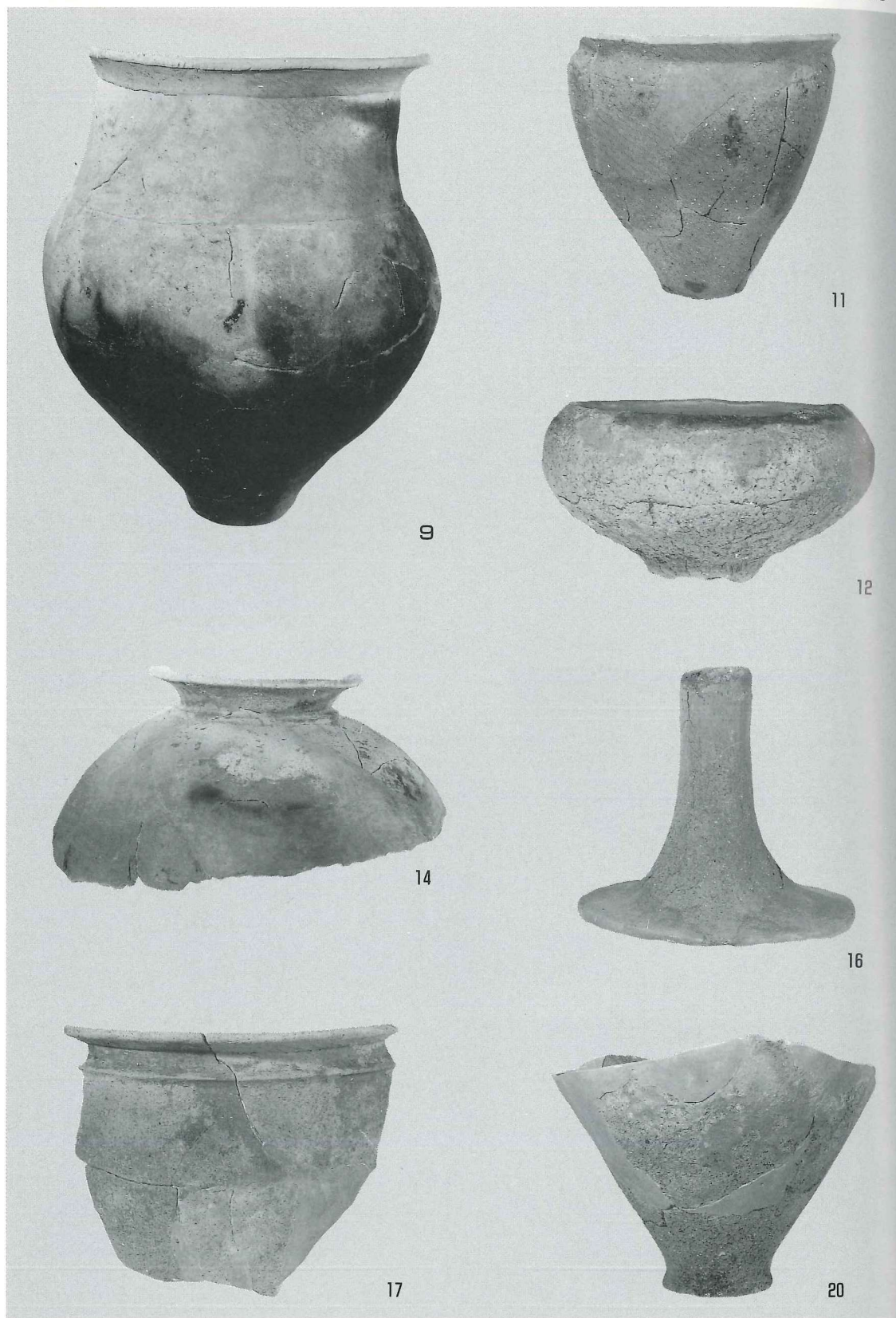
上の原古墳全景（南から）



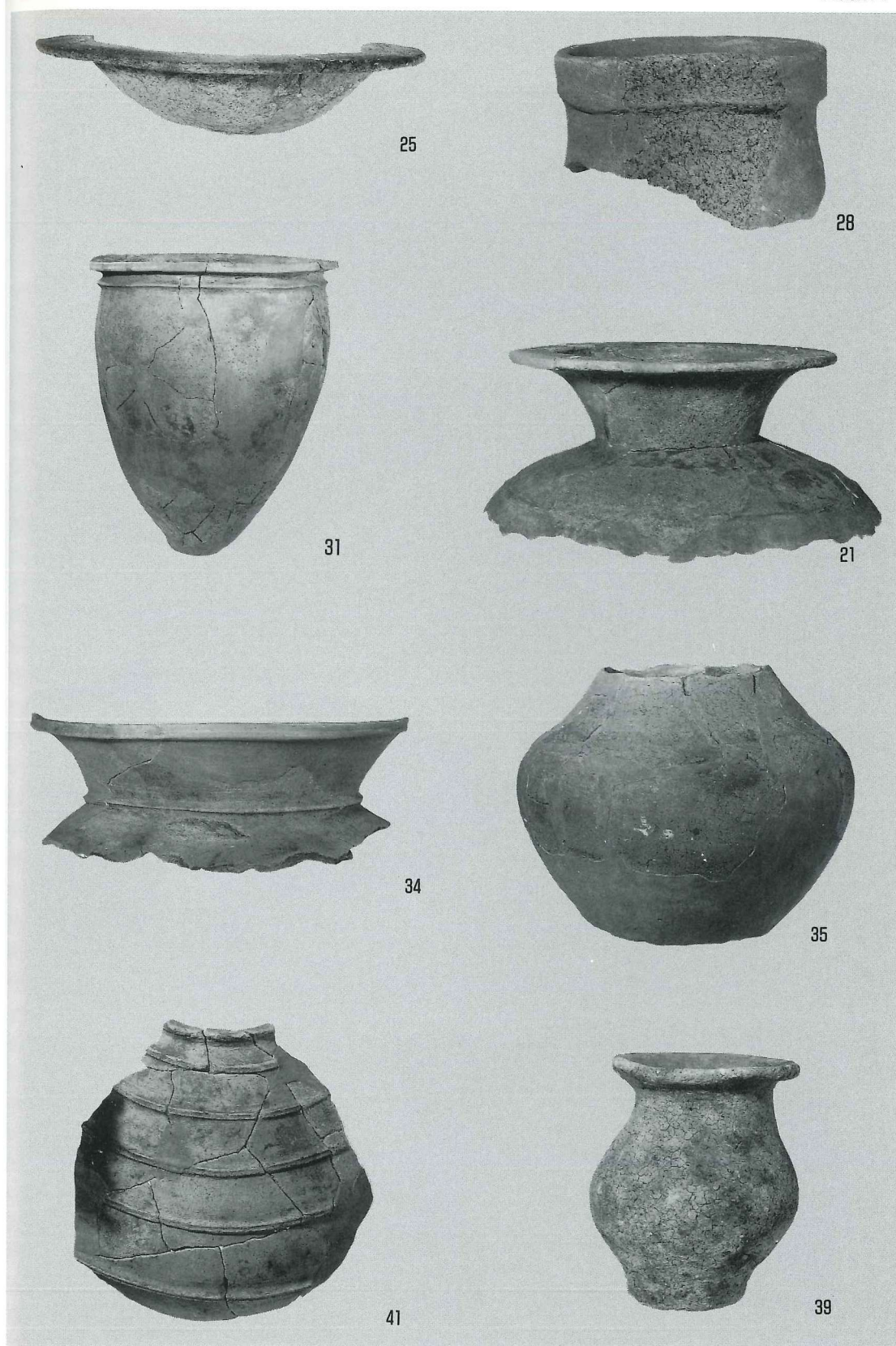
上の原古墳トレンチ内周溝（東から）



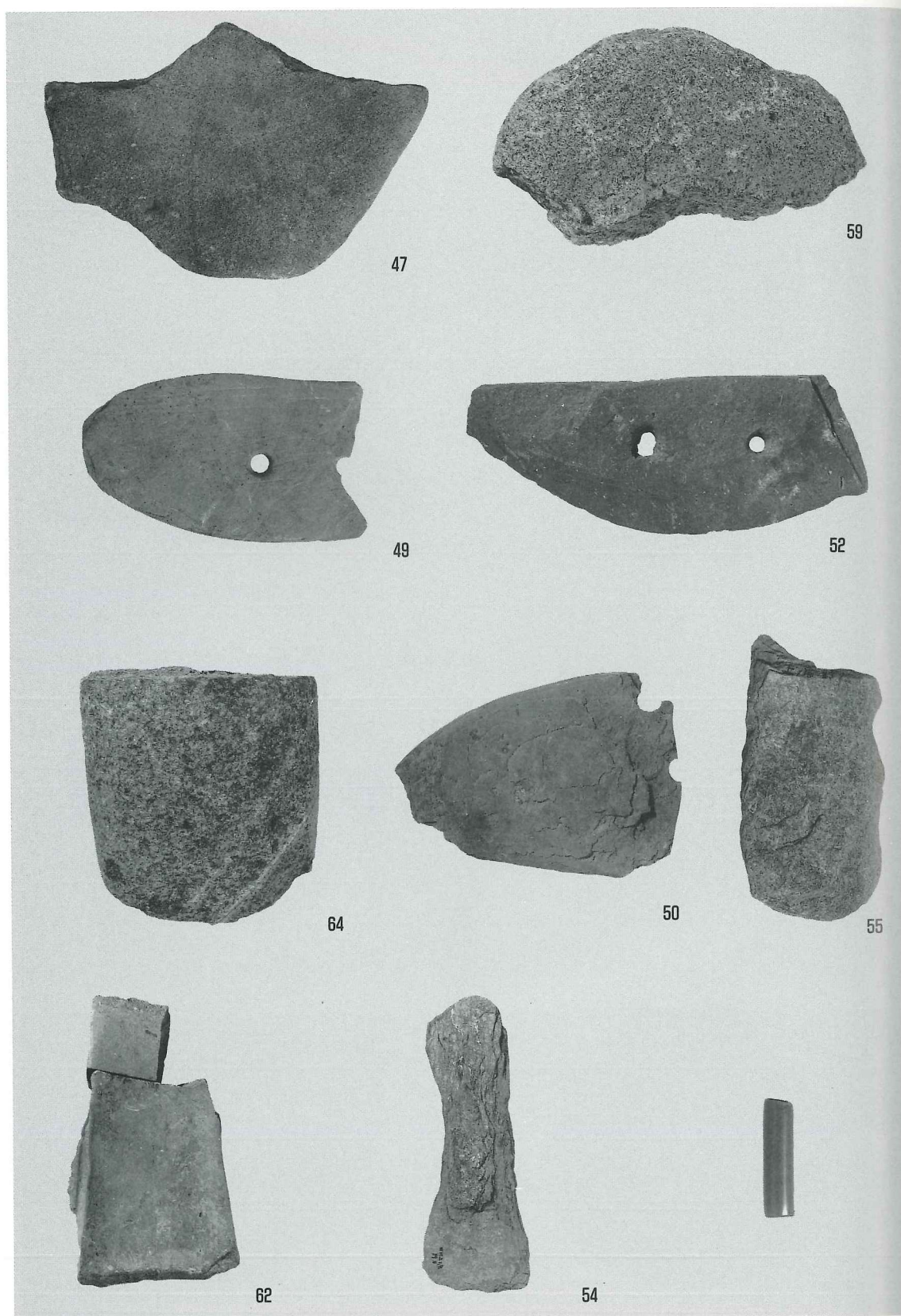
上の原遺跡出土土器 1



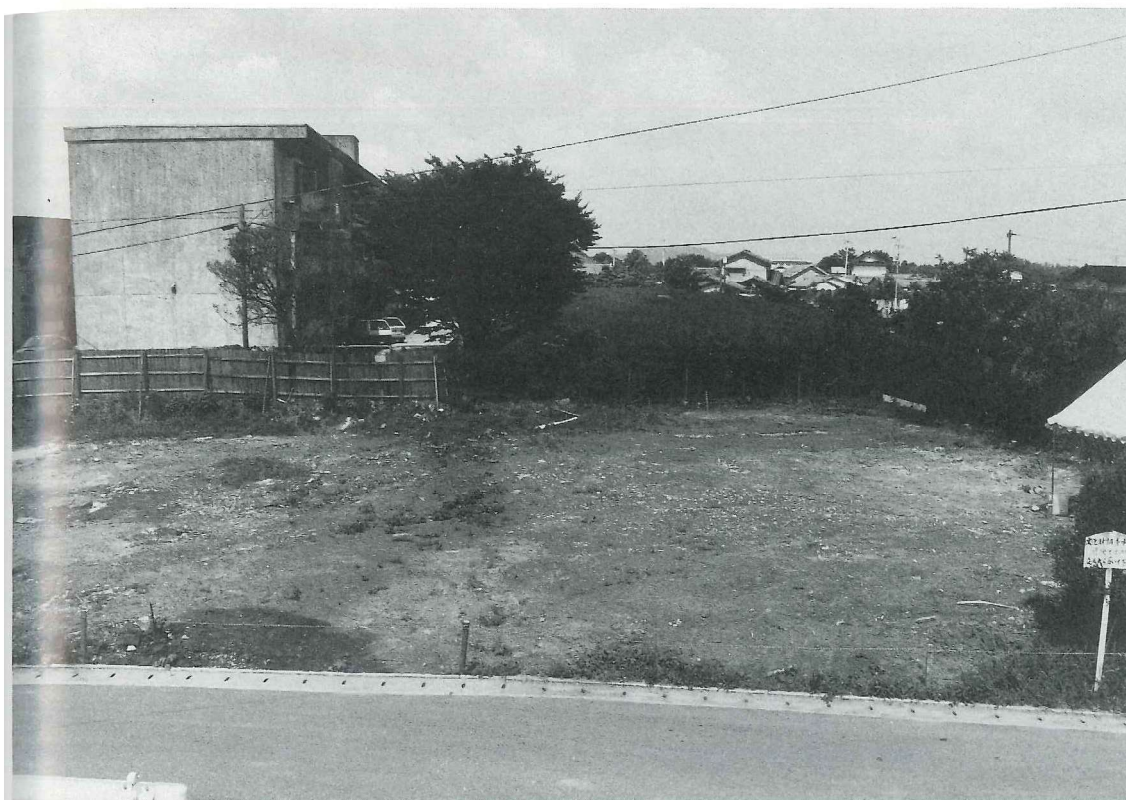
上の原遺跡出土土器2



上の原遺跡出土土器3



上の原遺跡出土石器・管玉



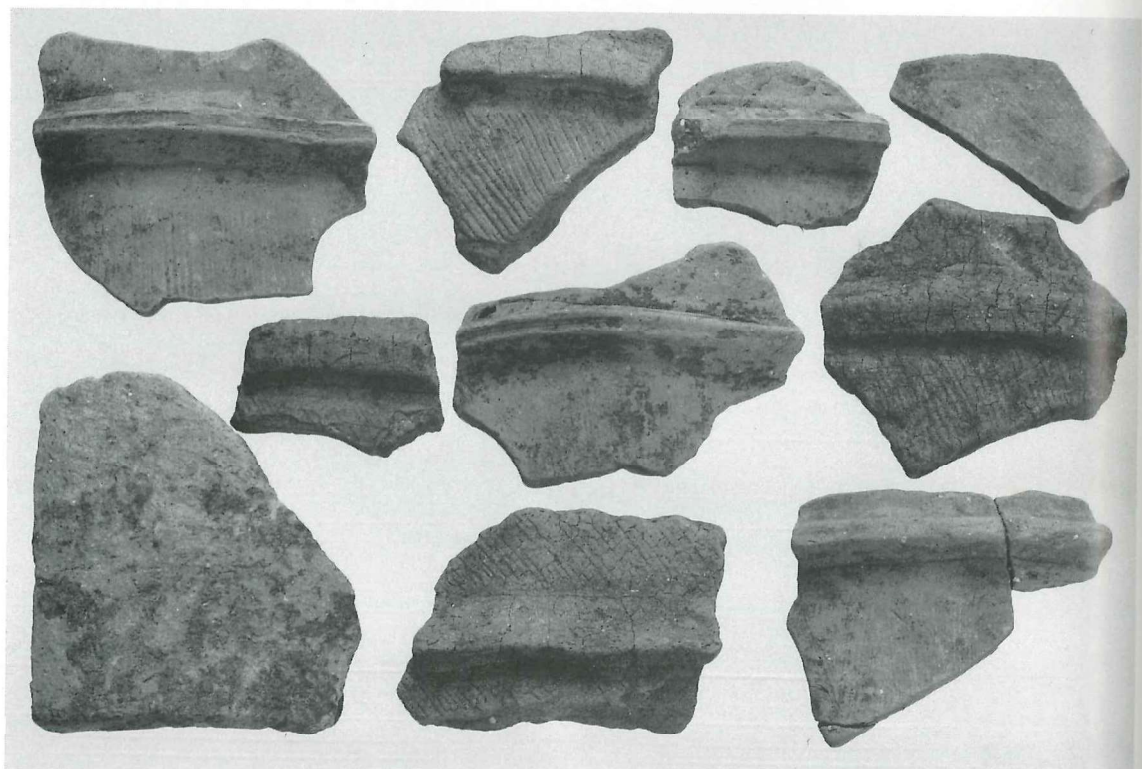
セスドノ古墳調査区全景（調査前 南から）



第1トレンチ周濠検出状況（南から）



周濠断面（第1トレンチ東壁 西から）



セストノ 古墳周濠内出土埴輪

精・上の原遺跡

付、セスドノ古墳周濠部の調査

田川市文化財調査報告書

第 7 集

平成 4 年 3 月 31 日

発 行 田 川 市 教 育 委 員 会
田 川 市 中 央 町 1 - 1
T E L (0947) 4 4 - 2 0 0 0

印 刷 是 澤 印 刷 株 式 会 社
田 川 市 伊 加 利 白 鳥 工 業 団 地
T E L (0947) 4 4 - 1 6 4 6

